

厚真町

桜丘 1 遺跡
ニタツポロ沢遺跡
日高幌内 1 遺跡

—厚真川水系チケッベ川外砂防工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

令和 3 年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター



土偶

(S = 1 : 1)



Ⅲ P-1 の土器



調査状況（西から）



層序断面（G11区、西から）



くぼ地断面（G12区周辺、南から）



石製品

(S = 1 : 1)



遺跡遠景（北西から）



沢トレンチ 1 断面（C・D1 区、西から）



基本土層断面（E4 区、南西から）



焼土（VF-2）断面（北から）



遺跡遠景（南東から）



遺跡全景（南西から）

例 言

1. 本書は、国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部が行う厚真川水系チケッペ川外砂防工事に伴い、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが令和3年度に実施した、厚真町^{あつ ま ち}桜丘1遺跡・ニタッポロ沢遺跡^{の たつぽろ ざい}・日高幌内1遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 上記の3遺跡については、当センターが令和4年3月に発行した『調査年報34』に概要を報告しているが、本報告書の内容が優先する。
3. 調査は第2調査部第2調査課が担当した。
4. 本書の執筆は、Ⅵ章をのぞき、新家水奈・広田良成・山中文雄が分担し、文責は各項目の末尾に括弧で示した。編集は山中が行った。
5. 遺構図の整理は桜丘1遺跡を山中が、ニタッポロ沢遺跡を新家が、日高幌内1遺跡を広田が行い、遺物の整理は桜丘1遺跡を山中が、ニタッポロ沢遺跡・日高幌内1遺跡を新家が担当した。
6. 現地での写真撮影は新家・広田・山中が行い、掲載遺物の撮影及び写真図版の作成は第2調査部第1調査課の菊池慈人の協力を得た。
7. 黒曜石の産地推定については、株式会社パレオ・ラボに委託した。
8. 土偶頭部の自然科学的分析、土器片の赤化部分の分析については、第1調査部普及活用課の立田理の協力を得た。
9. 調査・報告にあたり、下記の諸機関及び諸氏から御指導・御協力をいただいた（順不同、敬称略）。
北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課：藤原秀樹 村本周三 工藤研治
厚真町教育委員会：乾 哲也 奈良智法
千歳市教育委員会：豊田宏良 直江康雄
登別市教育委員会：菅野修宏
熊本大学：小畑弘己

記号等の説明

1. 遺構名の略称は、帰属する層位名を冠して以下のように表した。

層位 \ 遺構	竪穴 建物跡	土坑	焼土	土器片 集中	剥片 集中	礫 集中
Ⅲ層	ⅢH	ⅢP	ⅢF	ⅢPB	ⅢFB	ⅢSB
Ⅴ層	ⅤH	ⅤP	ⅤF	ⅤPB	ⅤFB	ⅤSB
Ⅵ層	ⅥH	ⅥP	ⅥF	ⅥPB	ⅥFB	ⅥSB

2. 土層の表記は自然層位（基本層序）がローマ数字、遺構の層位がアラビア数字である。
3. テフラについては、以下の略号を用いたところがある。
 Ta-a：樽前 a テフラ Ta-b：樽前 b テフラ Ta-c：樽前 c テフラ Ta-d：樽前 d テフラ
 B-Tm：白頭山・苦小牧テフラ
4. 方位記号は座標北（方眼北）を指す。
5. 遺構の縮尺は原則として 1：40 で、いずれもスケールを付してある。
6. 平面図の「・」付きアラビア数字は、その地点の標高（単位：m）を表す。
7. 遺構の計測値で、欠損部分や未調査部分がある場合は現存長を（ ）で閉じて示した。
8. 遺物の縮尺は以下のとおりで、いずれもスケールを付してある。
 復元土器・土器拓本・礫石器 1：3 剥片石器・磨製石斧・土製品・石製品 1：2
 土偶 2：3
9. 実測した遺物に欠損部分がある場合は、現存値を（ ）で示した。
10. 石器実測図に付した記号で、V—V は敲打痕、└─┘ または └─┘ は捺痕を表す。
11. 野外土性・粘着性・堅密度・層界の判定には、『土壌調査ハンドブック』（日本ペドロジー学会編 1997）に記された以下の基準を用いた。
- 「野外土性」 砂土：ほとんど砂ばかりで、ねばり気を全く感じない。砂壤土：砂の感じが強く、ねばり気はわずかしかない。シルト質壤土：砂はあまり感じないが、サラサラした小麦粉のような感触がある。埴土：わずかに砂を感じるが、かなり粘る。軽埴土：ほとんど砂を感じないで、よく粘る。重埴土：砂を感じないで、非常によく粘る。
- 「粘着性」 なし：土壌がほとんど指に付着しない。弱：土壌が一方の指に付着するが、他方の指には付着しない。指を離したときに土壌はのびない。中：両指頭に付着する。指を離したときに土壌が多少糸状にのびる傾向を示す。強：両指頭に強く付着する。指を離したときに土壌が糸状にのびる。
- 「堅密度」 すこぶるしょう：ほとんど抵抗なく指が貫入する。しょう：指が土層内にたやすく深く入る。軟：はっきりと深い指のあとが容易にできる。堅：強く押しても指のあとがわずかしが残らない。固結：移植コテによってやっと土壌を削れる。
- 「層 界」 画然：層界の幅が 1cm 未満。明瞭：1～3cm。判然：3～5cm。漸変：5cm 以上。

目 次

カラー図版	
例 言	
記号等の説明	
目 次	
挿図目次	
表目次	
写真図版目次	

I 調査の経過と方法

1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査にいたる経緯	1
(1) 平成 30 年北海道胆振東部地震	1
(2) 埋蔵文化財保護のための事前協議	2
4 調査の経過	5
(1) 発掘調査の経過	5
(2) 整理作業の経過	7
5 調査の方法	7
(1) 発掘作業の方法	7
(2) 整理作業の方法	8
(3) 遺物の分類	9

II 遺跡の位置と周辺の遺跡

1 遺跡の位置	11
(1) 厚真町	11
(2) 桜丘 1 遺跡	11
(3) ニタツボロ沢遺跡	16
(4) 日高幌内 1 遺跡	16
2 周辺の遺跡	16
(1) 桜丘・幌里地区の遺跡	16
(2) 幌内地区の遺跡	17
3 幌里 5 遺跡の遺物	18

III 桜丘 1 遺跡

1 概 要	21
2 発掘区の設定	23
3 層 序	23
4 遺 構	26
(1) 遺 構	26
(2) 遺構出土の遺物	31
5 包含層出土の遺物	38
(1) 土 器	38
(2) 石 器	49
(3) 土製品・石製品	57

IV ニタツポロ沢遺跡	
1 概 要	67
2 発掘区の設定	67
3 層 序	67
4 遺 構	70
5 包含層出土の遺物	70
(1) 土 器	73
(2) 石 器	77

V 日高幌内1遺跡	
1 概 要	89
2 発掘区の設定	89
3 層 序	89
4 遺 構	89
5 包含層出土の遺物	92
(1) 土 器	92
(2) 石 器	93

VI 自然科学的分析	
1 桜丘1遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定	99
2 土偶の自然科学的分析	103
3 土器片の赤化部分の材質分析	107

VII 総 括	
1 桜丘1遺跡	111
(1) 遺跡の特徴について	111
(2) ⅢP-1出土土器の時期について	112
(3) I群b類土器に伴う 石器群について	113
(4) 黒曜石製石器の産地推定について	114
(5) 土偶の時期について	115
2 ニタツポロ沢遺跡	116
3 日高幌内1遺跡	116

引用・参考文献

写真図版

報告書抄録

挿図目次

I 調査の経過と方法

図 I-1 厚真川水系直轄砂防事業に関連する 遺跡の位置	3
図 I-2 厚真川水系直轄砂防事業箇所図	3
図 I-3 桜丘 1 遺跡発掘区	4
図 I-4 ニタツポロ沢遺跡発掘区	4
図 I-5 日高幌内 1 遺跡発掘区	5

II 遺跡の位置と周辺の遺跡

図 II-1 厚真町の遺跡分布図	12
図 II-2 桜丘・幌里地区周辺の遺跡分布図	14
図 II-3 桜丘 1 遺跡の近現代遺跡	15
図 II-4 幌内地区の遺跡分布図	18
図 II-5 幌里 5 遺跡の遺物	19

III 桜丘 1 遺跡

図 III-1 遺構分布図	22
図 III-2 発掘区層序断面図	25
図 III-3 III-P-1、III-SB-1	27
図 III-4 VH-1	29
図 III-5 VPB-1、VFB-1、VSB-1、VSB-1	30
図 III-6 遺構出土の土器 (1)	32
図 III-7 遺構出土の土器 (2)	33
図 III-8 遺構出土の土器 (3)	34
図 III-9 遺構出土の土器 (4)	35
図 III-10 遺構出土の土器 (5)・石器	37
図 III-11 包含層出土の土器 (1)	39
図 III-12 包含層出土の土器 (2)	40
図 III-13 包含層出土の土器 (3)	41
図 III-14 包含層出土の土器 (4)	43
図 III-15 包含層出土の土器 (5)	45
図 III-16 包含層出土の土器 (6)	47
図 III-17 包含層出土の土器 (7)	48
図 III-18 包含層出土の石器 (1)	51
図 III-19 包含層出土の石器 (2)	52
図 III-20 包含層出土の石器 (3)	53
図 III-21 包含層出土の石器 (4)	54
図 III-22 包含層出土の石器 (5)	55
図 III-23 包含層出土の石器 (6)	56
図 III-24 包含層出土の土製品・石製品	58
図 III-25 遺物分布図 (1)	59
図 III-26 遺物分布図 (2)	60
図 III-27 遺物分布図 (3)	61

IV ニタツポロ沢遺跡

図 IV-1 III・V 層上面地形図	68
図 IV-2 遺構位置図	68
図 IV-3 調査区北側および沢トレンチ 1・2 土層図	69
図 IV-4 VF-1・2、石皿片出土地点	71
図 IV-5 包含層出土の土器 (1)	72
図 IV-6 包含層出土の土器 (2)	74
図 IV-7 包含層出土の土器 (3)	76
図 IV-8 包含層出土の石器 (1)	78
図 IV-9 包含層出土の石器 (2)	79
図 IV-10 包含層出土の石器 (3)	80
図 IV-11 出土遺物分布図 (1)	83
図 IV-12 出土遺物分布図 (2)	84

V 日高幌内 1 遺跡

図 V-1 最終面地形・遺構位置図	90
図 V-2 基本土層図	90
図 V-3 疎集中 (VSB-1) と出土石器	91
図 V-4 V 層出土の土器	92
図 V-5 V 層出土の石器	94
図 V-6 出土遺物分布図	95

VI 自然科学的分析

1 桜丘 1 遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定	
図 1 黒曜石産地分布図 (東日本)	99
図 2 黒曜石産地推定判別図 (1)	101
図 3 黒曜石産地推定判別図 (2)	101
図 4 黒曜石産地推定判別図 (3)	101
2 土偶の自然科学的分析	
図 1 測定部位と拡大写真	104
図 2 蛍光 X 線スペクトル図	105
図 3 X 線透過画像	106
図 4 CT 画像	106
3 土器片の赤化部分の材質分析	
図 1 測定部位と拡大写真	108
図 2 蛍光 X 線スペクトル図	109

VII 総括

図 VII-1 III-P-1 出土の土器	112
図 VII-2 I 群 b 類土器に伴う石器群	113
図 VII-3 黒曜石製石器の産地推定結果	114
図 VII-4 土偶出土地点周辺の遺物と北海道の縄文時代 後期後半～晩期初期の主な土偶	115

表目次

I 調査の経過と方法	
表 I-1 遺構・遺物集計	6
II 遺跡の位置と周辺の遺跡	
表 II-1 厚真町の遺跡一覧	13
表 II-2 幌里5遺跡掲載遺物一覧	20
III 桜丘1遺跡	
表 III-1 遺構一覧	21
表 III-2 土製遺物集計	23
表 III-3 石製遺物集計	24
表 III-4 実測図掲載土器一覧	62
表 III-5 拓影図掲載土器一覧	63
表 III-6 掲載石器一覧	64
表 III-7 掲載土製品・石製品一覧	65
表 III-8 遺構出土陳計測値一覧	65
IV ニタツポロ沢遺跡	
表 IV-1 検出遺構一覧	85
表 IV-2 出土遺物点数一覧	85
表 IV-3 掲載土器一覧	86
表 IV-4 掲載石器一覧	87
V 日高幌内1遺跡	
表 V-1 検出遺構一覧	96
表 V-2 出土遺物点数一覧	96
表 V-3 掲載土器一覧	96
表 V-4 掲載石器一覧	97
VI 自然科学的分析	
1 桜丘1遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定	
表1 分析対象	99
表2 東日本黒曜石産地の判別群	100
表3 測定値および産地推定結果	102
表4 時期および器種別の産地	102
2 土偶の自然科学的分析	
表1 分析結果	103
3 土器片の赤化部分の材質分析	
表1 分析結果	107

写真図版目次

カラー図版1 桜丘1遺跡	
土偶	
III P-1の土器	
カラー図版2 桜丘1遺跡	
調査状況(西から)	
層序断面(G11区、西から)	
くぼ地断面(G12区周辺、南から)	
石製品	
カラー図版3 ニタツポロ沢遺跡	
遺跡遠景(北西から)	
沢口レンチ1断面(C・D1区、西から)	
基本土層断面(E4区、南西から)	
焼土(VF-2)断面(北から)	
カラー図版4 日高幌内1遺跡	
遺跡遠景(南東から)	
遺跡全景(南西から)	
モノクロ図版	
桜丘1遺跡	
図版1 遺跡周辺の空中写真	
遺跡遠景(北東から)	
遺跡から近視岩川上流方面の眺望(南西から)	
図版2 高位部分調査状況(北から)	
遺構確認調査範囲東側調査状況(西から)	
図版3 追加範囲調査状況(西から)	
高位部分全景(III層)(西から)	
高位部分全景(VI~VII層)(西から)	
遺構確認調査範囲西側調査終了状況(東から)	
切土部分(南東から)	
近現代遺跡(西から)	
近現代遺跡(北東から)	
図版4 近現代遺跡土層断面(東から)	
III P-1坑口部周辺土器出土状況(北西から)	
III P-1坑口部土器出土状況(西から)	
III P-1土層断面(西から)	
図版5 III SB-1検出(北東から)	
VH-1完掘(北西から)	
図版6 VH-1土層断面(南から)	
VH-1 HF-1検出(南西から)	
VH-1 HP-1土層断面(南西から)	
VH-1 HP-2土層断面(東から)	
VH-1 HP-5土層断面(南西から)	
VPB-1検出(西から)	
VFB-1検出(西から)	

- 図版7 VSB-1 検出（北から）
 VSB-1 調査状況（東から）
 VSB-1 下位検出（北東から）
 VSB-1 検出（北東から）
 土鍋頭部出土状況（南東から）
- 図版8 遺構出土の土器（1）
- 図版9 遺構出土の土器（2）
- 図版10 包含層出土の土器（1）
- 図版11 包含層出土の土器（2）
- 図版12 包含層出土の土器（3）
- 図版13 包含層出土の土器（4）
- 図版14 遺構出土の石器・包含層出土の石器（1）
- 図版15 包含層出土の石器（2）
- 図版16 包含層出土の石器（3）
- 図版17 包含層出土の土製品・石製品
- ニタッポロ沢遺跡**
- 図版18 調査状況（東から）
 表土除去作業（西から）
 壁清掃作業（東から）
 沢部分Ⅲ層調査（西から）
 F4・5区Ⅲ層残存状況（南東から）
- 図版19 E3・4区Ⅲ層終了・V層検出状況（南から）
 町道下包含層検出（西から）
- 図版20 町道下Ⅲ層調査（東から）
 町道下V層調査（西から）
 低地部分（F3・4区）清掃作業（北から）
 沢トレンチ掘削作業（東から）
 低地部分（E3区）V層調査（東から）
- 図版21 G4・5区V層遺物出土状況（西から）
 縄文時代中期土器片（掲載No.10）出土状況（G5区、南西から）
 縄文時代晩期土器片出土状況（G4区、東から）

- 図版22 G4区獣骨・晩期土器片出土状況（北東から）
 黒曜石原石出土状況（G5区、南から）
 石斧（掲載No.39）出土状況（H8区、北から）
 北海道式石冠（掲載No.43）出土状況（F4区、南西から）
 石皿片（掲載No.53）出土状況（H8・9区、西から）
- 図版23 調査終了状況（東から）
 調査終了状況（西から）
- 図版24 包含層出土の土器（1）
- 図版25 包含層出土の土器（2）
- 図版26 包含層出土の石器（1）
- 図版27 包含層出土の石器（2）
- 日高幌内1遺跡**
- 図版28 調査状況（北西から）
 調査状況（西から）
- 図版29 遺跡遠景（南から）
 V層上面検出状況（南西から）
 調査状況（北西から）
 調査状況（東から）
 調査状況（北東から）
 雑集中（VSB-1）検出状況（北東から）
 V層土器（掲載No.1・2）出土状況（北東から）
 V層石器（掲載No.14）出土状況（北西から）
- 図版30 雑集中（VSB-1）出土の石器
 V層出土の土器
 V層出土の石器
- 幌里5遺跡**
- 図版31 幌里5遺跡の遺物

I 調査の経過と方法

1 調査要項

事業名：厚真川水系チケッペ川外砂防工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部

受託者：公益財団法人北海道埋蔵文化財センター

受託期間：令和3年5月19日～令和4年3月31日

遺跡名	登録番号	所在地	調査面積	現地調査期間
桜丘1遺跡	J-13-17	勇払郡厚真町字桜丘109-2、109-3、139-1、139-2、154-2	1,368m ²	令和3年8月3日～10月29日
ニタッポロ沢遺跡	J-13-73	勇払郡厚真町字幌里24、78-1、78-2、78-4、79-3、84-2、85、88、150-3	524m ²	令和3年8月3日～10月30日
日高幌内1遺跡	J-13-151	勇払郡厚真町字幌内688-1、696-1	208m ²	令和3年10月11日～10月29日

2 調査体制

第1調査部 部長 鈴木 信（常務理事兼務）

第2調査部 部長 村田 大

第2調査部第2調査課 課長 新家 水奈（発掘担当者）

〃 主査 広田 良成（発掘担当者）

〃 主査 山中 文雄（発掘担当者）

3 調査にいたる経緯

（1）平成30年北海道胆振東部地震

平成30（2018）年9月6日午前3時7分、胆振地方中東部（北緯42°41.4′、東経142°00.4′）の深さ37kmを震源とする「平成30年北海道胆振東部地震」が発生した。地震の規模はマグニチュード（M）6.7で、最大震度の7を厚真町、震度6強を安平町、むかわ町で観測したほか、北海道から中部地方の一部にかけて震度6弱～1を観測した。この地震は陸のプレート内で発生し、発震機構は東北東-西南西方向に圧力軸を持つ逆断層型とされる。地震発生以降、震源周辺では地震活動が活発化し、同日6時11分にM5.4（最大震度5弱）、10月5日にM5.2（最大震度5弱）、平成31年2月21日にM5.8（最大震度6弱）の地震が発生するなど、平成31年3月31日までに344回の有感地震が観測された。地震活動は次第に収まりつつあるが、今回活動した範囲の西側に、活断層である石狩低地東縁断層帯が延びていることもあり、引き続き地震への備えが呼びかけられている。

平成30年北海道胆振東部地震による人的被害は、死者44名（災害関連死3名を含む）、負傷者785名に上り、建物被害は住家全壊491棟、住家半壊1,816棟、一部損壊47,105棟等に及んだ（令和2年9月1日現在）。揺れの大きかった厚真町周辺では斜面崩壊が多発し、土砂災害によって同町の36名（幌内地区4名、富里地区4名、高丘地区2名、吉野地区19名、桜丘地区1名、朝日地区2名、幌里地区4名）が犠牲となった。また、北海道電力苫小牧厚真発電所等が相次いで停止したことにより電力需給のバランスが崩れ、地震発生後の午前3時25分には、離島を除く北海道全域の約295

万戸が停電する「ブラックアウト」に至った。札幌市清田区周辺では、火山灰質土を用いた「谷埋め盛土」の造成地で液状化が起り、地盤沈下によって住宅が傾くなどの被害が続出した。

(山中)

(2) 埋蔵文化財保護のための事前協議

前述した平成30(2018)年9月6日の北海道胆振東部地震で震度7を記録した厚真町内では、厚真川水系の各河川において大規模な河道閉塞や山腹崩壊がもたらされた。町内で特に被害が甚大であったのは日高幌内川、チケッペ川、チカエッ川、東和川の4河川である(図I-2)。同月中に北海道知事は国土交通大臣へ緊急要請を行い、翌10月国土交通省は「河川等災害関連緊急事業」を直轄事業として指定した。これを受け北海道開発局室蘭開発建設部(以下、室蘭開建)は厚真川水系土砂災害復旧事業所を発足、10月1日にまず日高幌内川の直轄災害復旧事業が着手され、11月1日にチケッペ川、チカエッ川、東和川の災害復旧も直轄事業化が決定した。いち早く着手した日高幌内川の緊急対策砂防設備は翌平成31(2019)年3月に完成し、4月にはチカエッ川、令和元(2019)年7月には東和川、同年8月にはチケッペ川でそれぞれ緊急対策砂防設備が完成した。室蘭開建は、この先の降雨等による河道閉塞部の越流浸食や、崩壊土砂の再移動による土砂災害を防ぐため、恒久対策工(特定緊急砂防事業)を継続することとし、平成31(2019)年4月に厚真川水系土砂災害復旧事業所を「厚真川水系砂防事業所」と改めた。地震直後に緊急対策工で設置した砂防堰堤の嵩上げ、付け替え道路の建設、溪流保全工等の恒久対策工は令和3年現在も続けられている。

この直轄緊急砂防事業に伴い、平成30(2018)年12月25日に室蘭開建より北海道教育委員会(以下、道教委)へ埋蔵文化財保護のための事前協議書が提出された。これを受け、道教委は翌令和元(2019)年7月11日所在調査を行い、チカエッ川砂防事業用地内31,440m²、チケッペ川砂防事業用地内33,890m²について要試掘と回答、同年11月26日に桜丘1遺跡、29日にニタッポロ沢遺跡の試掘調査が実施された。その結果、道教委は桜丘1遺跡で1,200m²、ニタッポロ沢遺跡で1,050m²の発掘調査が必要と回答した。この際、要発掘調査対象にはならなかったが、ニタッポロ沢遺跡の隣接地を「ニタッポロ沢2遺跡(J-13-143)」、チケッペ川上流の包蔵地を「幌里5遺跡(J-13-144)」として新規登録した。

試掘結果を受け、道教委と室蘭開建は要発掘調査の2遺跡について現地協議を行い、包蔵地範囲と重複する工事範囲を確認、同年12月5日に再協議となった。道教委は同月中に概算面積での発掘調査積算を公益財団法人北海道埋蔵文化財センター(以下、センター)に依頼、結果が室蘭開建に伝えられた。

令和2(2020)年3月に厚真川水系砂防事業所は砂防指定地^{*1}を告示、指定地内での付帯工事や、砂防堰堤延長等の工事面積や設計の変更に伴い、発掘調査についての再協議が行われた。同年9月15日に室蘭開建、道教委、センターの3者は現地で打ち合わせを行い、桜丘1遺跡については、復興事業であることから、道教委はチカエッ川上流部の所在調査を室蘭開建からの協議書到着前に実施し、要試掘調査範囲を回答した。その後10月13日付で室蘭開建から道教委へ再協議書が提出され、道教委は10月19日に要発掘調査面積について回答、桜丘1遺跡(J-13-17)は1,343m²(遺構確認区612m²を含む)、ニタッポロ沢遺跡(J-13-73)は524m²、計1,867m²が発掘調査対象面積となった。令和3(2021)年1月、道教委からセンターへ通知があり、センターは同事業にかかわる発掘調査を受託、同年5月13日、室蘭開建と発掘調査業務について契約するに至る。調査は令和3年度に実施し、当該年度内に報告書を刊行することとなった。

センターが令和3年8月3日から桜丘1遺跡の現地調査を開始していた中、8月27日に室蘭開建



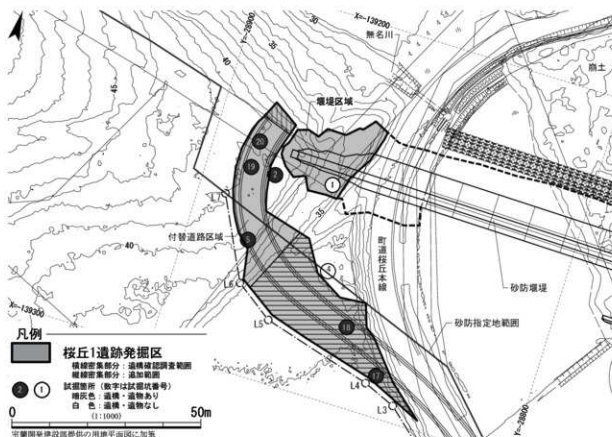


図 I-3 桜丘1遺跡発掘区

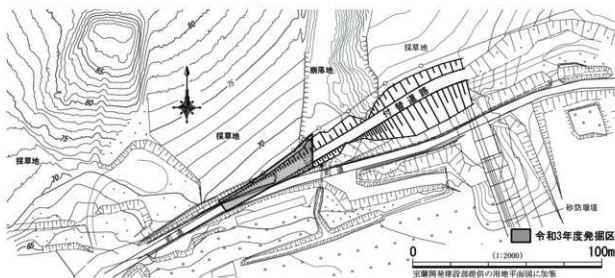


図 I-4 ニタツボロ沢遺跡発掘区



図 I-5 日高幌内1遺跡発掘区

より道教委へ日高幌内川直轄砂防事業にかかわる埋蔵文化財保護のための事前協議書が提出された。これを受け道教委は8月31日に工事区域内600m²について試掘調査を行い、結果、再協議とした。工法や設計変更等について室蘭開建と協議の結果、道教委は9月9日、埋蔵文化財包蔵地「日高幌内1遺跡（J-13-151）」に該当する215m²について、要発掘調査とする旨を室蘭開建に回答した。室蘭開建は9月13日に厚真町教育委員会を経由して道教委宛てに発掘調査依頼についての通知文を提出、これを受け道教委は翌14日にセンターに発掘調査を通知、センターは日高幌内1遺跡の調査を受託した。調査は令和3年度に実施し、当該年度内に先の2遺跡と合わせて報告書を刊行することになった。

(新家)

※1 砂防指定地とは、「砂防法」に基づき指定されている区域のことで、土砂の流出による被害を防止するため、砂防えん堤等の砂防設備が必要と判断される土地や区域内で行われる一定の行為の禁止や制限が必要とある土地について、国土交通大臣が指定することとなっている。主に、①洪流若しくは河川の縦横浸食又は山腹の崩壊等により土砂等の生産、流失若しくは堆積が顕著であり、又は顕著となるおそれのある区域、②風水害、震災等により、洪流等に土砂等の流出又は堆積が顕著であり、砂防設備の設置が必要と認められる区域、である。

4 調査の経過

(1) 発掘調査の経過

桜丘1遺跡の調査は、震災後の緊急対策工で建設された砂防堰堤の延長部分と、それに伴う町道の付け替え部分の2か所で実施した。低地の畑地部分612m²については、耕作による包含層の削平が想定されたため、道教委により遺構確認調査の指示を受けた。

重機による表土除去は、令和3（2021）年7月19日に開始した。周辺および調査区内の排土環境を踏まえ、調査区を4区画に分けて行う計画を立てた。低位部は5～6m下に町道が通り、調査区内の崖状の地形縁辺に沿って並ぶ高木の防風林が未伐採だったため、表土除去作業は高位部分から着

手した。平坦なテラス状の台地が続いていると思われた高位部分は、厚さ数メートルの盛土造成により、斜面を埋め立てて作られた地形であることが分かった。盛土・客土の厚さ、土量の多さのため、表土除去作業は難航し、8月3日の調査開始後も表土除去作業と杭打設作業を並行して行った。遺構確認区の重機による表土除去は、8月26日に、高位部の表土除去作業は9月7日に終了した。

厚い客土を除去し、人力による包含層調査を行う中、高位部の北側台地の先端の包含層(Ⅲ・Ⅴ層)がさらに北側の調査区外へ続くことが分かった。周辺の両包含層からは継続して土器、石器等の出土が見られ、8月24日センターはこの状況を道教委に報告した。道教委はこれを受けて8月31日現地で試掘を行い、室蘭開建と協議、9月1日付で台地先端部25m²について追加調査が必要と回答し、センターに発掘調査を指示した。これにより桜丘1遺跡の調査面積は1,368m²に変更となった。

当初、桜丘1遺跡のⅢ層調査は全体の25%と計画されていたが、包含層の削平部分が多いものの、残存するⅢ層からは、遺物・遺構が想定より多く検出された。そのため残存するⅢ層はすべて人力による慎重な調査を行い、遺構・遺物の検出に努めた。また、調査区全体のⅥ層(漸移層)からは、縄文時代早期の遺物、特に東釧路式系の土器片が多く出土することがわかり、手掘りによる作業は最後まで続いた。

ニタッポロ沢遺跡は、調査区が現町道と重複しており、仮設道路の完成を待つ9月半ばから準備工に着手する計画であったが、工事用仮設道路の開通が9月27日にずれ込んだため、重機による表土除去を含めた準備作業は9月28日から開始した。排土場の制約により、当初は調査区を東西に分けて排土場所を確保する計画であったが、この時点で町道の砂利撤去ができていなかったため、急速町道下以外の調査部分全ての表土除去を行うこととした。人力による発掘調査は、町道下の表土除去を待ちながら、まず町道以外の包含層の調査に着手し、その後町道下の表土除去・杭打設作業・人力による発掘調査を並行して行った。

調査区東側では、現代の造成土が2メートルの厚さで堆積した下から古い沢状地形が現れ、常時水が湧く状況となった。ダンプカーによる排土の搬出にも難航し、表土除去作業には当初予定を大幅に越えた時間を要した。10月4日までの4日間表土除去作業を行った後、10月7日には日高幌内1遺跡の表土除去作業を並行して着手した。日高幌内1遺跡の表土除去作業は1日のみで終了し、翌8日、ニタッポロ沢遺跡の表土除去作業を再開した。この時点で町道の砂利の撤去を始め、町道下の表土除去を終了、並行して行っていた杭打設作業は10月13日に終了した。台地の調査と並行し、東側の沢地形部分にはトレンチを2か所入れ、土層と遺物出土状況を確認した。旧地形の最も深いと想定した部分には泥炭層もみつかったが、遺物は摩滅した土器1点、黒曜石の剥片1点のみで、継続性は認められず、沢地形の調査は終了とした。

一方沢地形部分と台地の間に、常に水が湧く低地部分があり、Ⅴ層が強粘質で固結した水成堆積の粘土層になっていた。ここからは土器片が複数確認されたため、排水作業を行いながら、低地部分の包含層調査を進めた。ニタッポロ沢遺跡の調査は10月27日に終了し、28日に撤収作業を行った。

日高幌内1遺跡は、ニタッポロ沢遺跡の発掘調査とほぼ並行して行った。10月7日、天候状況と

表I-1 遺構・遺物集計

遺 跡	遺 構							遺 物						
	聖穴 建物跡 (VIB)	土坑 (ⅡF)	盛土 (VF)	土器片 集中 (VFB)	剥片集中 (VFB)	縄集中 (VSB)	縄集中 (VSB)	合計	土器	石器	縄	土製品	石製品	合計
桜丘1遺跡	1	1			1	1	1	7	6,381	5,983	1,531	5	1	13,901
ニタッポロ沢遺跡			2					2	2,184	781	940			3,905
日高幌内1遺跡							1	1	61	221	450			732
合 計	1	1	2	1	1	1	2	10	8,626	6,986	2,920	5	1	18,538

ニタッポロ沢遺跡の表土除去の合間を調整しながら、重機による表土除去を着手・終了した。翌日8日にはグリッド杭を打設し、翌々日9日(土)から現地調査を開始した。人力による調査を進めていくうち、調査区内の南側斜面が地滑り等により大きく削平されていることがわかった。このため、10月18日付でセンターから道教委に面積変更に関する事務連絡を行い、21日道教委は現地を確認、翌22日に空欄開建に日高幌内1遺跡の発掘調査面積7m²減について回答を行った。その後日高幌内1遺跡の現地調査は順調に進み、10月26日に終了した。

(2) 整理作業の経過

現地での整理作業(一次整理作業)は、雨天時で発掘作業が困難な日などに行った。作業内容は図面の点検、土壌の水洗、遺物の水洗・乾燥・分類、遺物カード・台帳の作成、注記、仮収納等である。

センターでの整理作業(二次整理作業)は、現地調査終了後の11月1日から開始した。作業内容は、未了の遺物注記作業、遺物台帳の表計算ソフトへの入力、土器片の接合・復元、石器等の接合、遺物実測、土器片の拓本および断面実測、遺構図等の調整、各種図面のトレース、掲載遺物の写真撮影、挿図・写真図版作成、遺物分類の変更・遺物集計、原稿執筆、報告書レイアウト作業などである。なお、黒曜石の産地推定を株式会社パレオ・ラボに委託し、令和4(2022)年1月下旬に結果が報告された。

5 調査の方法

(1) 発掘作業の方法

現地での調査体制は調査員3名、運転技能作業員2名、技能作業員1名、普通作業員20名であった。厚真町字朝日に設営した事務所から、ワゴン車で各遺跡に作業員を運送し調査を行った。

桜丘1遺跡の現況は荒地と畑地であった。重機によるⅠ～Ⅱ層(表土～樽前bテフラ)除去作業を高位部から着手し、人力で壁出し作業、清掃作業を行い、Ⅲ層上面で地形図と全体写真撮影を行った。調査区壁面や排土場は、強雨による崩壊や流出を防ぐため、土嚢を積み上げて養生を行った。Ⅲ層～Ⅴ層の遺構・遺物の出土傾向を把握するため、25%調査を人力で行った。Ⅲ層包含層調査終了後、当初重機による除去作業の計画であったⅣ層(樽前cテフラ)を人力による除去作業に切り替えた。Ⅴ層上面で地形図を作成、全体写真の撮影後、人力による包含層調査を行った。遺構確認調査区であった低位部の畑地は、排土条件の都合上東西の2回に分けて、重機による表土除去・人力による清掃と残存する包含層の調査及び遺物の回収を行った。調査を終了した発掘区は最終面地形図を作成し、調査区全体の終了写真を撮影した。その後重機により、調査で搬出した排土の埋め戻し作業を行った。

ニタッポロ沢遺跡の調査前の状況は、道路(町道)と採草地であった。東側端はニタッポロ沢へと続く斜面で立木もあり、沢への土砂の流出を防ぐため、沢側の表土を一部残した。また特に大きい立木は、厚く盛られた客土を取り除いた際に不安定になるため、伐採を控えた。重機によるⅠ～Ⅱ層(表土～樽前bテフラ)除去は、町道部分とそれ以外、南北の横に細長い調査区に分けて行った。Ⅲ層調査終了後は重機手に制限があったことから、当初重機による除去を予定していた樽前cテフラ(Ⅳ層)の大部分を人力で除去し、時間の節約に努めた。調査区外への排土場確保が困難であったため、最終面地形測量後の調査終了区を順次排土場として活用した。地形の測量は、Ⅲ層上面、Ⅴ層上面、最終面の3面で行った。

Ⅲ層調査終了後、東端の沢地形および低湿部は、湧水により基本層序(特にⅣ層より下位)が平地・台地のものと異なっていたため、幅1～1.5m×長さ約3mのトレンチを設けた。結果、沢部分

ではグライ化・固結化したⅣ層が厚く堆積し、Ⅴ層の層厚は非常に薄く、出土遺物も見られなかったため、トレンチによる調査をもって終了とした。出水による冠水を防ぐため、トレンチを釜場としてポンプによる排水を行いながら調査を続けた。台地との境に広がる低湿部では、粘土化・グライ化した厚いⅣ層下に、同じく粘土化・グライ化したⅤ層が台地裾から一定の範囲で見られたため、この部分の厚いⅣ層は一部重機による除去後、手掘りによるⅤ層調査を行い、土器片等の遺物を回収した。調査終了後は、重機により調査区の埋め戻しを行った。

日高幌内1遺跡は、調査対象となる遺物包含層はⅤ層のみであったため、重機によりⅠ～Ⅳ層を除去した。人力による清掃後、Ⅴ層上面の検出状況を全体写真撮影と地形測量により記録した。Ⅴ層調査終了後は最終面地形測量および調査終了写真の撮影を行い調査を終了した。

いずれの遺跡も、検出した遺構や遺物の出土状況は写真と図で記録し、遺構に伴う遺物は出土地点をそれぞれ記録した（点取り作業）。包含層出土の遺物は遺跡名、発掘区、層位、遺物の種類（土器・石器・礫）、日付を記入したポリ袋に入れ、一括して取り上げた。遺構はトレンチや半截により断面の作図と撮影を行った。剥片・碎片集中は、土壌ごと取り上げて回収したものもある。

現場で作成した図面には地形測量図・土層断面図・遺構平面図・遺構断面図・遺物出土状況図などがある。また、台帳には遺構台帳、写真台帳、遺物取り上げ台帳などがある。写真撮影はデジタル一眼レフカメラ（ニコン D5600、ニコン D750）、コンパクトデジタルカメラ（キャノン IXY180、ソニー DSC-RX0）、UAV を選択的に使用し、必要に応じて高所撮影用のポール等を用いて調査区の全体写真、遺跡遠景写真、平面地形データ撮影等を行った。

（2）整理作業の方法

現場では遺物の水洗・乾燥、分類、遺物カード・台帳の作成、土壌の水洗、注記等の基礎的な整理作業（一次整理）を行った。

台帳は土器と石器等に分けて遺跡ごとに作成した。土壌の水洗は、黒曜石の剥片・碎片を回収するためにフルイ等を使用して行った。注記は白色のポスターカラーで記入し、保護のため文字の上からラッカーを塗布した。注記項目は遺跡名の略称、発掘区、層位、点取り遺物の場合は遺物番号で、各遺跡の注記例は以下のとおりである。

桜丘1遺跡	遺構出土	：サ1・VH-1・床上・6（遺跡名・遺構名・層位・遺物番号）
	包含層出土	：サ1・D13・Ⅲ（遺跡名・発掘区・層位）
ニタッポロ沢遺跡	包含層出土	：ニタ・E4・Ⅴ（遺跡名・発掘区・層位）
日高幌内1遺跡	包含層出土	：ヒ1・B2・Ⅴ（遺跡名・発掘区・層位）

江別市の北海道埋蔵文化財センター整理作業棟で行った二次整理の内容は、4節（2）の通りである。土器実測図、土器断面図、石器実測図等は Adobe Illustrator CC を用いてデジタルトレースした。拓本はスキャナで取り込み、断面図と合成した。石器の実測図・トレース図は一部、株式会社トラスト技研に委託した。

掲載遺物の撮影には、ハッセルブラッド H3D II HC Macro 120mm を使用した。写真図版は Adobe Photoshop、Adobe InDesign 等を使用して作成した。

整理作業終了後の遺物は、遺跡ごとに「掲載遺物」と「非掲載遺物」に大別し、分類ごと、発掘区ごとにコンテナにおさめ、「遺物収納台帳」を作成した。調査報告終了後の出土遺物は、北海道教育

委員会の指示により厚真町教育委員会に移管の予定である。

(3) 遺物の分類

土器等

I 群 縄文時代早期に属する土器群。

a 類：貝殻腹縁文・条痕文・沈線文のある土器群。

b 類：摺糸文・絡条体圧痕文・短縄文などが施される土器群。東釧路式系土器群に相当するもの。

b-1 類：東釧路Ⅱ式、**b-2 類**：東釧路Ⅲ式・コックロ式、**b-3 類**：中茶路式、**b-4 類**：東釧路Ⅳ式。

II 群 縄文時代前期に属する土器群。

a 類：縄文尖底・丸底土器など。網文式・静内中野式・加茂川式などに相当するもの。

b 類：円筒土器下層式・植苗式・大麻Ⅴ式などに相当するもの。

III 群 縄文時代中期に属する土器群。

a 類：円筒土器上層式。厚真Ⅰ式などに相当するもの。

b 類：中期後半の土器群。天神山式・柏木川式・北筒式・ノダツⅡ式などに相当するもの。

IV 群 縄文時代後期に属する土器群。

a 類：余市式・タブコブ式・手稲砂山式・入江式などに相当するもの。

b 類：ウサクマイⅠ式・手稲式・鯉調式に相当するもの。

c 類：堂林式・三ツ谷式・御殿山式に相当するもの。

V 群 縄文時代晩期に属する土器群。

a 類：大洞Ⅱ・Ⅲ式などに相当・併行するもの。東三川式など。

b 類：大洞Ⅰ・Ⅱ式などに相当・併行するもの。美々Ⅲ式など。

c 類：大洞Ⅳ・Ⅴ式などに相当・併行するもの。タンネトウⅠ式など。

VI 群 縄文時代終りに属する土器群。

a 類：前半期の土器群。砂沢式・二枚橋式・恵山式、アヨロⅡ類・Ⅲ類など。

b 類：後半期の土器群。後北Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ式、北大Ⅰ・Ⅱ式など。

VII 群 縄文文化期に属する土器群。

土製品

石器等

分類に使用している器種の名称、および掲載順は以下のとおりである。

剥片石器

石鏃：素材を細かく扁平加工し、端部に尖頭部を作り出したおおむね長軸 4 cm 以下、厚さ 0.8 cm 以下の石器。

石槍：素材の両面を加工し、尖頭部を作り出したおおむね長軸 4 cm 以上、厚さ 0.8 cm 以上の石器。

石錐：素材の端部に錐状の尖頭部を作り出した石器。

つまみ付きナイフ：素材の端部にノッチ状の加工でつまみ部を作り出した石器。石匙。

スクレイパー：一部を残し、縁辺に加工を施した石器でナイフ類に分類されないもの。石筥、削器、搔器。

両面調整石器：素材の両面を加工したもので、石鏃・石槍などに分類されない石器。

楔形石器：素材の両端に両極剝離による対向する剝離がある石器。

- R フレイク：素材に二次加工を施したもので、定形的な石器に分類されない剥片。二次加工剥片。
U フレイク：素材に微細な剥離痕がみられる剥片で、使用したとみられる石器。微細剥離痕剥片。
フレイク（剥片）：石核・定形的石器などから剥離された不定形な石器片。

礫石器

石斧類（破片・原材・石のみ・擦り切り残片含む）：打ち欠き・敲打・研磨により、斧状の刃部を作り出した石器。および製作時にできた破片や素材。

すり石：小型礫にすり痕が観察される石器。たたき石の機能をもつものもある。

たたき石（くほみ石含む）：礫に潰打痕がある石器。すり石の機能をもつものもある。くほみ石は敲打により使用痕がくぼんでいるたたき石。

北海道式石冠：上面観が楕円形または扁平で、側面に持ち手とみられる敲打による溝をハチマキ状に一巡させ、底面に平らなすり面をもつ独特な形状をもつ石器。機能はすり石の一種である。頂部から全体にかけ敲打による整形が施されているものがほとんどで、ハチマキ状の加工をもたないものもある。

砥石：礫の片面もしくは複数面にすり痕（砥面）が観察される石器。

石皿：平坦面をもつ大型礫にすり痕が観察される石器。

台石：平坦面をもつ大型礫に打撃痕が観察される石器。

加工礫：剥離等の簡単な加工がみられる礫。

礫・礫片

石製品

（新家）

II 遺跡の位置と周辺の遺跡

1 遺跡の位置

(1) 厚真町

厚真町は北海道胆振総合振興局東部の勇払郡に位置する。町域は厚真川の全流域と入鹿別川の右岸流域から構成され、東西 17.3km、南北 32.5km の広がりをもつ。面積は 404.6km² を測り、その大部分にあたる 366.9km² を厚真川流域が占める。町の南西側は苫小牧市、北西側は勇払郡安平町、北側は夕張郡由仁町と夕張市、東側は勇払郡むかわ町に接し、南側は約 6.5km にわたって太平洋に面する。

基幹産業は水稲栽培を主体とする農業で、ハスカップの作付面積は日本一である。中心市街地は厚真川の中流部右岸側に形成されており、令和 3（2021）年 12 月末現在の人口は 4,393 人、世帯数は 2,114 世帯を数える。町名の「アツマ」は、アイヌ語の「アットマム」(at-to-mam「向こうの湿地帯」)が転訛した可能性などが考えられている（厚真村 1956：19）。

町内を北東から南西に貫流する厚真川は、流路延長 52.3km の二級河川である。町域北端の 640m 峰南斜面に源を発し、日高幌内川、頗美字（ハビウ）川、東和川、ウクル川、知伏辺（チケツベ）川、軽舞川等の支流を集めて太平洋に注ぐ。上流域は夕張山地から連続する標高 300～600m 台の山地・丘陵で、大部分は山林であるが、厚真ダムと厚幌ダムの建設により、ダム湖が形成されている。

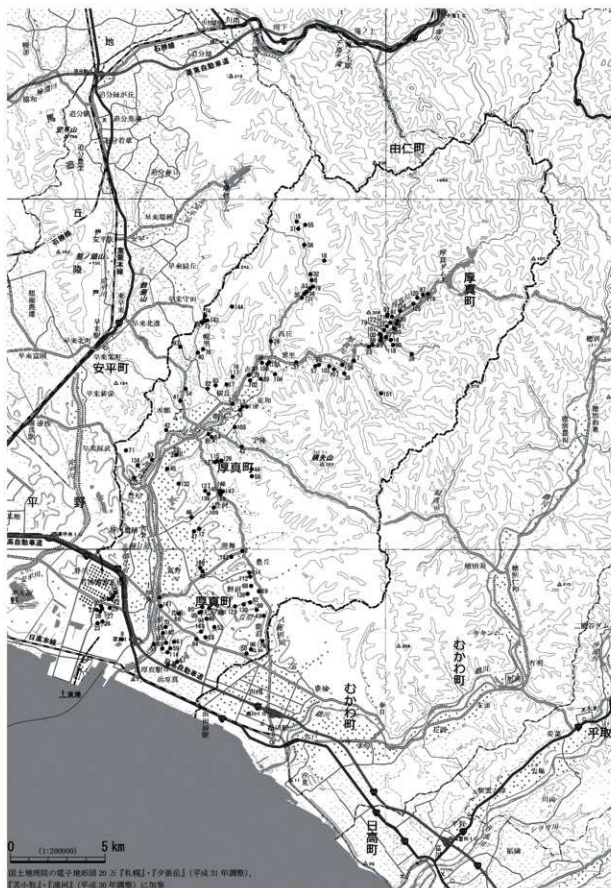
中流域には夕張山地から連続する標高 100～200m 台の丘陵と、馬追丘陵に連続する標高 100m 台の丘陵（早来丘陵）が分布し、両者の間にある回廊状のくぼ地は由仁安平低地へとつながる。厚真川とその支流沿いの沖積低地は、主に水田として利用されている。

下流域は勇払平野の東部にあたり、標高 10～20m 台の樹枝状に開析された洪積台地と大小の沼が点在する沖積低地からなる。太平洋に面する沿岸は、苫小牧港（東港）付近をのぞき砂浜海岸が続いており、かつては厚真川の河口から鶴川方面へ砂丘がのびていた。南西部は主に牧草地や畑として利用されているが、厚真川の河口周辺は苫小牧東部地域産業用地に含まれ、河口の右岸側には苫小牧港（東港）と苫東厚真発電所が、静川台地には大規模な石油備蓄基地が立地する。沿岸部の漁業はウバガイ（ホッキガイ）を主体に、カレイ類、シシヤモ等が漁獲されている。

(2) 桜丘 1 遺跡

桜丘 1 遺跡は厚真町役場から北東へ約 3km、近悦府（チカエツ）川右岸側の丘陵縁部に立地する（図 II-2 の 17）。標高は 35～40m で、近悦府川によって形成された谷底平野との比高は約 5m を測る。丘陵頂部の標高は 100～200m 台で、北東方面の夕張山地へ向けて高度を上げていく。近悦府川は厚真川の二次支流で、丘陵を開析して谷底平野を形成し、広い沖積低地に出たのち知伏辺川に合流して厚真川に注ぐ。川の名はアイヌ語の「チカイエプ」(chi-kaye-p) に由来し、「折れて流れているもの」を意味する（厚真村 1956：21）。

遺跡所在地の桜丘は町域中央部の西側に位置する。桜丘は昭和 32（1957）年の字名改正以前は近悦府と呼ばれた地域で、厚真村が苫小牧外六ヶ村戸長役場から分離した明治 30（1897）年には、専厚寺（図 II-2 の注記「桜丘」下の寺院記号）境内に戸長役場が置かれるなど、村の中心地であったが、明治 32（1899）年に仁湾道路が開通すると、次第にその機能は知伏辺（現在の厚真市街）に移転していった。なお、現行の字名である桜丘は、「かつて近悦府神社と称した桜丘神社に桜の並木があったことによる」という（『角川日本地名大辞典』編纂委員会 1987：589）。桜丘神社は専厚寺の東



図Ⅱ-1 厚真町の遺跡分布図

表II-1 厚真町の遺跡一覧

番号	遺跡名	時代(時期)	番号	遺跡名	時代(時期)
1	上厚真遺跡	縄文(中)、縄縄文、縄文	77	オニキシベ12遺跡	縄文(中・後)、縄縄文(前半)、縄文、アイヌ
2	群島遺跡	縄文(中)、縄縄文(前半)	78	オニキシベ13遺跡	縄文(中・後)
3	群島遺跡	縄文(中・後)、縄縄文(前半)、縄文(後半)、近代	79	上幌内4遺跡	縄文(中・後)、縄縄文、縄文(後半)、アイヌ
4	概里1遺跡	縄文(中)、縄縄文	80	一里遺跡	縄文(中)、アイヌ
5	新和遺跡	縄文(中)、縄縄文、アイヌ	81	シヨロマ1遺跡	縄文(前・後)、アイヌ
6	高丘1遺跡	縄文(中)、縄縄文(前半)	82	東ニッポロ1遺跡	縄文(中・後)
7	幌内1遺跡	縄文(中)、縄縄文(前半)	83	東ニッポロ2遺跡	縄文(前・中・後・後)
8	共和遺跡	縄文(後)、縄縄文(前半・後半)、縄文(前半)	84	高丘4遺跡	縄文(中)
9	高丘5遺跡	不明	85	概里3遺跡	縄文(前・中・後)
10	厚真10遺跡	縄文(中・後)	86	概里4遺跡	縄文(後)
11	厚真11遺跡	縄文	87	イタバンシノササチ3遺跡	縄文(後)
12	豊沢2遺跡	縄縄文	88	厚和2遺跡	縄文(早・前・中・後・後)、アイヌ
13	東和遺跡	縄縄文	89	オニキシベ4遺跡	縄文
14	オニキシベ1遺跡	縄文(中・後)、アイヌ	90	オニキシベ5遺跡	縄文(中)
15	高丘3遺跡	縄文(中)	91	上幌内2遺跡	縄文
16	概里チャレン	アイヌ	92	シヨロマ2遺跡	縄文(中)
17	概里1遺跡	-	93	概里4遺跡	縄文
18	高丘2遺跡	縄文(後)	94	厚和8遺跡	縄文(中・後)
19	高丘10遺跡	不明	95	厚和9遺跡	縄文(中)
20	厚真1遺跡	縄文(中)	96	高丘6遺跡	縄文(中)
21	厚真2遺跡	縄文(中)	97	概里2遺跡	縄文(中)、縄縄文(後半)、縄文(後半)
22	厚真3遺跡	縄文(早・中・後・後)、縄縄文(後半)、縄文(前半)	98	概里6遺跡	縄文(中・後)、縄文
23	厚真4遺跡	縄文(中・後)、縄縄文(前半・後半)、近代	99	概里7遺跡	縄文(早・前・中・後・後)
24	厚真5遺跡	縄文(後)、縄縄文(前半)	100	サツカセナイチャレン	アイヌ
25	厚和1遺跡	縄文(早・前・中・後・後)、アイヌ	101	サツカセナイチャレン	縄文(早・前・中・後)、縄縄文、縄文、アイヌ
26	厚真7遺跡	縄文(早・中・後・後)、縄縄文(前半)、縄文(前半)	102	古野1遺跡	縄文(中・後)
27	厚真8遺跡	縄文(中・後・後)、縄縄文(後半)	103	概里7遺跡	縄文(早・前・中・後・後)、縄文、アイヌ
28	美里2遺跡	縄文(早・中)、アイヌ	104	ニッパナイ遺跡	縄文(前・中・後・後)、縄縄文(後半)、縄文(後半)、アイヌ
29	厚真11遺跡	縄文(早・前・中・後・後)、縄文(前半)	105	平塚3遺跡	縄文(中)
30	上幌内1遺跡	縄文(中)	106	豊沢3遺跡	縄文(後・後)、縄文、アイヌ
31	高丘4遺跡	縄文	107	オコウロ1遺跡	縄文(前・中)、縄文(後)、縄文
32	高丘5遺跡	縄文	108	概里2遺跡	縄文(前)、縄縄文(前半)
33	高丘6遺跡	縄文(早・中)	109	豊沢5遺跡	縄文(後・後)
34	高丘7遺跡	縄文(前・中)	110	厚和10遺跡	縄文(早・中・後)
35	高丘8遺跡	不明	111	豊沢2遺跡	縄文(早)
36	高丘9遺跡	縄縄文	112	豊沢3遺跡	縄文(中)
37	高丘11遺跡	縄文(早・前・中・後)、縄縄文、縄文、アイヌ	113	東和2遺跡	縄文(後)
38	概里4遺跡	縄文(中)	114	高丘5遺跡	縄文(後)
39	チヌマア1遺跡	縄文(中)	115	豊沢6遺跡	縄文(早・中・後)
40	概里3遺跡	縄文(中)	116	高丘3遺跡	縄文(早)
41	本郷1遺跡	縄文(中・後)	117	概里2遺跡	縄文(中・後)
42	本郷2遺跡	縄文(後)	118	オニキシベ6遺跡	縄文(後)
43	宇佐1遺跡	縄文、縄文、近代	119	イタバンシノササチ2遺跡	縄文(中・後)
44	宇佐2遺跡	縄縄文(前半)	120	イタバンシノササチ3遺跡	縄文(中・後)、縄縄文
45	美里1遺跡	縄文(中)	121	シヨロマ3遺跡	縄縄文(後半)
46	豊沢2遺跡	縄文	122	シヨロマ4遺跡	縄文(後)、縄縄文、縄文、アイヌ
47	豊沢3遺跡	縄縄文	123	上幌内3遺跡	縄文(早・前・中・後・後)、縄縄文、縄文、アイヌ
48	概里1遺跡	縄文	124	上幌内4遺跡	縄文(中・後)、アイヌ
49	概里2遺跡	縄文(中)、縄縄文	125	上幌内5遺跡	縄文(中・後)
50	概里3遺跡	縄文(前)	126	豊沢7遺跡	縄文(中・後)
51	厚和1遺跡	縄文(中)、アイヌ	127	豊沢8遺跡	縄文(後)
52	豊沢3遺跡	縄文(中・後)	128	ザイカルマ1遺跡	近代
53	厚真13遺跡	縄文(早・前・後・後)、縄縄文(前半)、縄文(前半)	129	長沼1遺跡	縄文(早)
54	本郷3遺跡	不明	130	長沼2遺跡	縄文
55	高丘11遺跡	縄文(後)	131	高丘13遺跡	縄文(前)、縄文
56	高丘12遺跡	縄文	132	上野1遺跡	縄文(中)
57	概里5遺跡	縄文(前)、アイヌ	133	高丘3遺跡	縄文(中・後)、アイヌ
58	概里4遺跡	縄文(早・後)	134	概里3遺跡	縄文(後)
59	厚和2遺跡	縄文(中・後)	135	三ツ月沼遺跡	縄文(後)
60	厚和3遺跡	縄文(後)	136	概里8遺跡	縄文(前・中)
61	厚和4遺跡	縄文(中)	137	豊沢9遺跡	縄文
62	豊沢4遺跡	縄文	138	概里5遺跡	縄文
63	厚和5遺跡	縄文	139	豊沢10遺跡	縄文(後)
64	新和2遺跡	縄文(中・後)	140	厚和11遺跡	縄文
65	豊沢5遺跡	縄文(後)	141	厚和12遺跡	縄文
66	厚和6遺跡	縄文(前)	142	概里3遺跡	縄文(中・後)、縄文(前半)
67	高丘12遺跡	縄文(早・後)	143	ニッパロ2遺跡	縄文(中・後)
68	概里2遺跡	縄文(早)	144	概里5遺跡	縄文(中)
69	豊沢遺跡	縄文(前・中・後)	145	豊沢11遺跡	縄文(早)、縄縄文
70	厚和7遺跡	縄文(後)	146	豊沢12遺跡	縄文(中・後)
71	豊川1遺跡	縄文(前・後・後)	147	豊沢13遺跡	縄文
72	高丘真3遺跡	縄文(早・後)、縄縄文	148	豊沢14遺跡	縄文(後)
73	ニッパロ沼遺跡	縄文(後・後)	149	厚和13遺跡	縄文
74	概里神社遺跡	縄文(早・後)	150	高丘4遺跡	縄文(後)
75	入部沼遺跡	縄文(中)	151	日高町1遺跡	縄文
76	概里3遺跡	縄文			

*北海道教育委員会のウェブサイト「北の遺跡案内」に基づいて作成

*番号は北海道教育委員会収載番号末尾の数字 U-13にて

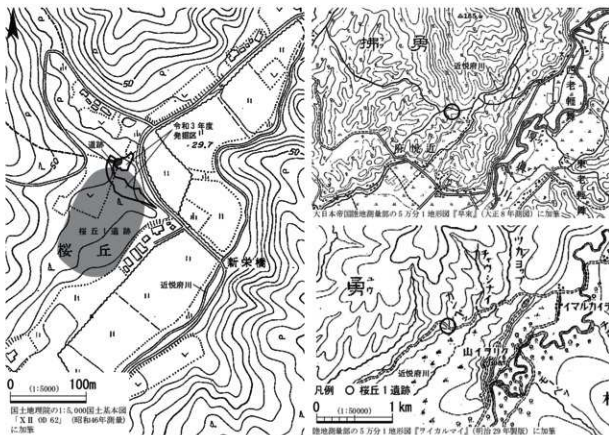


図Ⅱ-2 桜丘・幌里地区周辺の遺跡分布図

隣に鎮座していたが、昭和50(1975)年、厚真神社に御神体を合祀している。

本節の最後に、今回の発掘調査で検出した近現代の道跡について触れておく(図版3)。道跡の断面(図Ⅲ-2・図版4)をみると、道跡はⅥ～Ⅶ層付近まで掘削して造成されており、轍のくぼみが残る部分もある。掘り込み内には、最下位に樽前bテフラ(Ta-b)の混じる堅く締まった土層(3層)がみられるが、大部分はTa-bが多量に混じる砂壤土(1層)が堆積する。前者は道が利用されていた時期の堆積物、後者は新道開削後、道を埋めて畑を造成した時の堆積物と考えられる。発掘区西端における道幅は、上端に近いⅢ層上面で約3.4m、下端で約1.8m、深さ約1mを測り、10ライン付近で屈曲して発掘区外の西(丘陵高位側)と北(谷底側)へのびる(図Ⅲ-1)。

検出された位置からみて、この道跡は昭和46(1971)年測量の地形図に破線で示された道の続きで(図Ⅱ-3左)、大正8(1919)年測量の地形図(図Ⅱ-3右上)や明治29(1896)年製版の地形図(図Ⅱ-3右下)にみられる丘陵と谷底を結ぶ道と推定される。前者の地形図によると、桜丘1遺跡付近の谷底平野では、近悦府川に沿う道から、①丘陵を越えて西老軽舞にのびる道、②道跡がある丘陵に上る道が分岐し、②の道は道跡近辺の西方で知決辺方面と幌里方面に分岐している。近現代と道跡が営まれた時代とでは大きな開きがあるが、桜丘1遺跡の特徴の一つとして、道の分岐点が集まる場所に立地することを挙げておきたい。なお、後者の地形図に記入された「カンベツ」は桜丘1遺跡の北方を流れる無名川のアイス語河川名である。「ヤムベツ」(yam-pet)に由来し、「冷たい・川」、或は「栗の実・川」を意味する(厚真村1956:21)。また、「チャウシナイ」は桜丘チャシ跡(図Ⅱ-2の16)西側の沢にあたる。アイス語の「チャシウシナイ」(chasi-us-nay)に由来し、「磐・ある・沢」を意味する(厚真村1956:21)。



図Ⅱ-3 桜丘1遺跡の近現代道跡

(3) ニタッポロ沢遺跡

ニタッポロ沢遺跡は厚真町役場から北へ約4.5km、知決辺川に注ぐニタッポロ沢右岸の丘陵縁辺部に立地し(図Ⅱ-2の73)、標高は60~80mを測る。丘陵頂部の標高は100~200m台で、桜丘1遺跡の立地する丘陵とは知決辺川を挟んで連続しており、北東方面の夕張山地へ向けて高度を上げていく。知決辺川は丘陵を西に横断し、西方の早来丘陵との間にのびる同郷状の地形に出て流れを南に変え、西仁達幌川、東仁達幌川、近悦府川などの支流を集めて厚真川に合流する。川の名はアイヌ語の「チケブベツ」(chikep-pet)に由来し、「断崖・川」を意味する(厚真村 1956:21)。

遺跡所在地の幌里は町域中央部の西端に位置し、安平町早来地区に接する。幌里は昭和32年の字名改正以前は仁達幌と呼ばれた地域である。仁達幌(ニタッポロ)はアイヌ語の「ニタチ・ポロ・ナイ」(Nitchi-poro-nay)の下略形と考えられており、「その湿原が・大きい・沢」を意味する(厚真村 1956:21)。なお、幌里は仁達幌の幌に里を加えて命名された字名である。

(4) 日高幌内1遺跡

日高幌内1遺跡は厚真市街から東北東へ約10km、日高幌内川右岸の丘陵縁辺部に立地し(図Ⅱ-4)、標高は75m前後を測る。日高幌内川は、夕張山地に連なる頂部標高200m台の丘陵を北西に向かって開析する河川の一つである。谷間には谷底平野が形成されており、左岸側の丘陵を挟んで同じ方向に流れるシュルク沢川を合わせて厚真川に合流する。「厚真村史」(厚真村 1956:24)によれば、日高幌内川の原名はアイヌ語の「ポロナイ」(Poro-nay)で、「親である・沢」「大きい・沢」を、シュルクは(Surku)「トリカブト」を意味する。

(山中)

2 周辺の遺跡

(1) 桜丘・幌里地区の遺跡

厚真町の埋蔵文化財包蔵地(以下、遺跡)は、令和3(2021)年12月現在151か所が登録されている(図Ⅱ-1・表Ⅱ-1)。本節では桜丘1遺跡が所在する桜丘地区、ニタッポロ沢遺跡が所在する幌里地区の遺跡について概略を述べる。なお、遺跡名の後に付した()内の数字は、北海道教育委員会登録番号(J-13)末尾の数字で、図Ⅱ-1・2の番号と対応する。

桜丘地区 桜丘1遺跡(17)のほかに、桜丘チャシ跡(16)と桜丘2遺跡(117)が所在する。桜丘チャシ跡は、近悦府川右岸側の尾根状を呈する丘陵先端部に立地し、標高は72~78mを測る。丘先式のチャシ跡で、尾根を横切るV字状の壕や、先端部に切土造成の痕跡がみとめられる。平成21(2009)年に地形測量とトレンチ調査が行われ、樽前bテフラ(1667年)降下以前に構築されていることが判明した。

桜丘2遺跡は、桜丘チャシ跡と同一地点に立地する。同チャシ跡のトレンチ調査時に、樽前cテフラより下位の黒色土から、縄文時代中期の土器、同後期の土織、黒曜石剥片が出土している。

幌里地区 知決辺川流域に10か所の遺跡が所在する。現在のところ、知決辺川の最も上流側に位置する遺跡は幌里5遺跡(144)で、同川の右岸、標高約90mの微高地に立地する。令和元(2019)年7~11月にかけて、チケブベ川直轄砂防特定緊急砂防事業に伴い、北海道教育委員会による踏査・試掘調査が行われ、胆振東部地震による斜面崩壊の崩土中などから、縄文時代中期や擦文文化期の土器73点、黒曜石剥片類24点、片岩剥片1点、礫61点が収集されている。本章3節で遺物の一部を報告する。

知決辺川が丘陵を抜け出た場所には遺跡が多く分布する。この場所は厚真町と安平町の境界にあた

り、厚真町側には幌里1遺跡(4)・ニタッポロ沢遺跡(73)・幌里神社遺跡(74)・ニタッポロ沢2遺跡(143)、安平町側には、幌里神社遺跡(36)、守田3遺跡(71)、守田4遺跡(75)、守田5遺跡(76)、守田6遺跡(77)が分布する。幌里1遺跡(4)は、知決辺川右岸側の丘陵縁辺部に立地し、標高は90mを測る。『厚真村古代史』(厚真村教育委員会1956:15)に「第12図 仁達幌・西周文発見の土器及び石器」として北筒式土器や黒曜石の石槍などが図示されている。幌里神社遺跡(74)は厚真・安平両町にまたがる遺跡で、標高は90~100mを測る。縄文時代早期・後期の遺跡とされる。ニタッポロ沢2遺跡(143)は、知決辺川右岸側の緩斜面に立地し、標高は約70mを測る。遺跡の南側は同川支流のニタッポロ沢で画され、沢向かいに今回調査したニタッポロ沢遺跡(73)が立地する。縄文時代中期の土器片が出土している。なお、図Ⅱ-2左上の2は緑丘1遺跡、15は守田遺跡、16は緑丘2遺跡、17は緑丘3遺跡、66は守田2遺跡で、いずれも安平町の遺跡である。

丘陵を抜け、流路を南に変えた知決辺川の左岸側には、丘陵縁辺部に幌里2遺跡(40)、幌里3遺跡(76)が分布する。前者は標高約40mを測り、縄文時代中期の遺跡とされる。後者は標高約60mを測り、Tピットが検出されている。

知決辺川の支流、西仁達幌川の右岸緩斜面には幌里4遺跡(93)が分布する。標高は44~50mを測り、Tピットが検出されている。同じく支流の東仁達幌川流域には、東ニタッポロ1遺跡(82)、東ニタッポロ2遺跡(83)が分布する。前者は標高30~35mを測り、縄文時代中期・晩期の遺跡とされる。後者は標高67~71mを測り、縄文時代前期~晩期の遺跡とされる。

(山中)

(2) 幌内地区の遺跡

「幌内」の地名はアイヌ語の「ボロ・ナイ(大きい・沢)」に由来する。厚真町の幌内地区の集落は日高幌内1遺跡から約2.5km北西にあり、日高幌内川のほかマツカウス川、シュルク沢川、オコッコ沢川、メナの沢川もこの地区で厚真川に合流している。複数の支流が厚真川に流れ込み川幅を増す様相が、地名に反映されている。

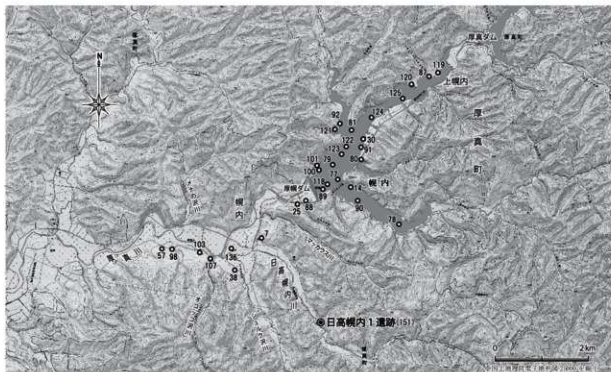
厚真川上流域の幌内地区の遺跡調査は、厚幌ダム建設に伴い平成14(2002)年から厚真町教育委員会によって行われ、平成24(2012)年以降は(公財)北海道埋蔵文化財センターも調査を行っている。また幌内・富里地区では、平成19(2007)年から厚幌ダム建設事業に連動した厚幌導水路事業に関する埋蔵文化財発掘調査も並行して行われるようになった。図Ⅱ-4には厚真町幌内地区の遺跡を掲載した。

このうち厚真町教育委員会が調査を行った遺跡は厚幌1(登録番号25)、上幌内モイ(79)、上幌内1(30)、上幌内2(91)、オニキシベ2(77)、オニキシベ4(89)、オニキシベ5(90)、オニキシベ6(118)、一里沢(80)、ショロマ1(81)、ショロマ2(92)、ショロマ3(121)、ヲチャラセナイチャシ跡(100)、ヲチャラセナイ(101)、幌内5(57)、幌内7(103)、幌内8(136)の17遺跡である。

北海道埋蔵文化財センターが調査を行った遺跡はオニキシベ1(14)、オニキシベ3(78)、厚幌1(25)、厚幌2(88)、幌内6(98)、幌内7(103)、オコッコ1(107)、イクバンドユクチセ2(119)、イクバンドユクチセ3(120)、ショロマ4(122)、上幌内3(123)、上幌内4(124)、上幌内5(125)、日高幌内1(151)の14遺跡である。

厚幌ダムは平成29(2017)年10月に試験湛水が行われ、発掘調査を終えた22遺跡がその底に沈んだ。翌平成30(2018)年8月13日にダムの供用が開始されたが、その24日後に北海道胆振東部地震が発生した。

(新家)



図Ⅱ-4 幌内地区の遺跡分布図

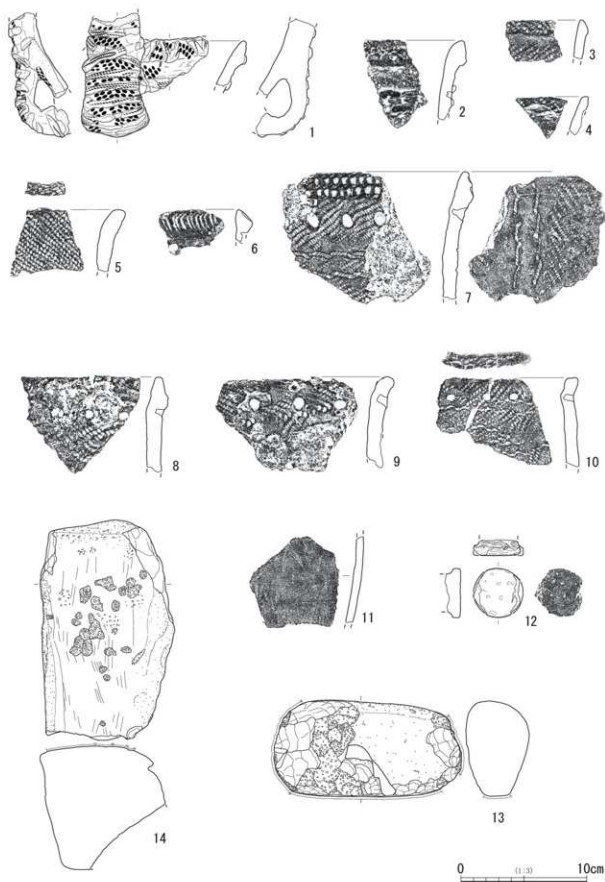
3 幌里5遺跡の遺物

崩土の試掘や表面採集で得られた遺物の一部を図Ⅱ-5に図示した。写真は図版31に掲載した。

Ⅲ群a類土器（1～3） 1は口縁部の突起下に橋状把手が付く。口縁部は外反し、切出形に肥厚する。肥厚帯の地文はRL斜行縄文で、その下の羽状を構成する縄文は、同原体の縦回転による施文とみられる。把手部分の地文もRL縄文のようである。肥厚帯には粘土紐が鋸歯状に貼付され、把手の上端で左側からの粘土紐と「×」状に交差する。把手部分には「×」状の交差よりも下に7本の粘土紐がほぼ等間隔に貼付される。粘土紐は突起部分（「×」状の交差よりも上）と肥厚帯の1cmほど下にも貼付される。粘土紐には、いずれも1段Lの擦糸圧痕文が加えられる。内面調整はミガキである。なお、橋状把手の側面図は、口縁部破片を接合していない状態で実測した。2・3の口縁部は切出形に肥厚する。2は磨耗しているが、胴部側にRL斜行縄文がみられる。2本の粘土紐間には、半截竹管状工具による刺突文が連続する。3は肥厚帯にRL斜行縄文、胴部側にLR斜行縄文が施される。内面調整はミガキである。

Ⅲ群b類土器（4～10） 4の口唇は平坦きみで、外面にはRL斜行縄文が施される。5の口縁部は外反し、平坦きみの口唇と外面にRL斜行縄文が施される。

6～10はⅢ群b類の北筒式である。6～8の口縁部は切出形に肥厚し、その下に中空状の工具による円形刺突文が連続する。6の肥厚帯にはヘラ状工具による爪形の押引文が施される。7の肥厚帯にはヘラ状工具による2列の押引文が施される。円形刺突文はやや斜め下から加えられ、断面は漏斗状を呈する。外面と内面には斜行縄文と1段Rの綾絡文が施される。外面はLR原体、内面は同原体を縦回転させたものかもしれない。8はLR斜行縄文と1段Rとみられる綾絡文が施される。円形刺突文は、中空状の工具によって斜め下から施される。9の口縁部は外反し、口唇部は丸みを帯びる。結束第1種羽状縄文地にやや下方からの円形刺突文が連続する。胎土には礫が目立ち、大きいもので



図Ⅱ-5 幌里5遺跡の遺物

1.1cmを測る。10の胴部は膨らみ、口縁部がくびれる部分に円形刺突文が施される。口唇部は平坦で、縄文がかすかにみられる。外面はLR斜行縄文に0段の綾絡文が加えられる。

Ⅶ群土器 (11・12) 11は胴部破片で、外面の上半は横方向、下半は縦方向のハケメがみられる。内面は全体が黒色化しており、調整は縦方向のヘラミガキが施される。12は高坏の底部で、爪形の文様がわずかに残存する。

石器 (13・14) 13はすり石で、平面が楕円形の礫を素材とする。すり面の縁には剝離整形痕が連続する。長軸両端には敲打痕の集中と剝離痕がみられ、正面左側は敲打整形されたようである。正面の一部は被熱して赤みを帯びる。14は亜角礫を素材とした台石で、正面には擦痕や凹痕の集中がみられる。13・14の石材は砂岩である。

(山中)

表Ⅱ-2 幌里5遺跡掲載遺物一覧

神図	掲載番号	図版	分類	出土位置	層位	点数	石器計測値				部位 石器石材	備考
							長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
Ⅱ-5	1	21	Ⅱa	表保	—	3					口縁部	横状把手付
#	2	#	Ⅱa	表保	—	1					口縁部	
#	3	#	Ⅱa	表保	—	1					口縁部	
#	4	#	Ⅱb	表保	—	1					口縁部	
#	5	#	Ⅱb	表保	—	1					口縁部	
#	6	#	Ⅱb	表保	—	1					口縁部	
#	7	#	Ⅱb	表保	—	1					口縁部	
#	8	#	Ⅱb	試験坑TR-05	層土V	1					口縁部	
#	9	#	Ⅱb	表保	—	1					口縁部	
#	10	#	Ⅱb	試験坑TR-06	層土V	1					口縁部	
#	11	#	Vb	表保	—	1					胴部	
#	12	#	Vb	表保	—	1					底部	高坏、底径3.9cm
#	13	#	すり石	表保	—	1	7.5	14.8	5.0	783	砂岩	
#	14	#	台石	表保	—	1	17.4	10.5	9.8	1,977	砂岩	

Ⅲ 桜丘1遺跡

1 概要

遺跡は厚真町役場から北東へ約3km、近悦府（チカエツ）川右岸側の丘陵縁部に位置する（図Ⅱ-2）。標高は35～40m程で、近悦府川によって形成された谷底平野との比高は約5mを測る。発掘調査範囲は、平成30年北海道胆振東部地震の緊急対策工として整備された砂防堰堤の延長区域（堰堤区域）と、堰堤延長に伴う町道の付替区域（付替道路区域）の2か所で（図Ⅰ-3）、周知の埋蔵文化財包蔵地である桜丘1遺跡の北部にあたる。両区域とも、切土によって高位部分（標高約40m）と低位部分（同約35m）とに分断されており、無名川へ下る斜面部分は、盛土によって平坦面が造成されていた。調査前の状況は、高位部分が荒蕪地、低位部分の大半が畑地であるが、かつては前者も畑として利用されており、遺物包含層の一部が削平されていた。

層序は、Ⅰ層：表土または耕作土、Ⅱ層：樽前bテフラ（1667年降下）、Ⅲ層：黒色土、Ⅳ層：樽前cテフラ（約2,500年前降下）、Ⅴ層：黒色土、Ⅵ層：暗褐色土（漸移層）、Ⅶ層：樽前dテフラ（約9,000年前降下）で、Ⅲ層の上位には白頭山-苦小牧テフラ（10世紀半ば降下）が部分的にみられる。Ⅲ層では縄文文化期前葉と擦文文化期、Ⅴ層では縄文時代中期・後期、Ⅵ層では縄文時代早期の遺構・遺物を主に検出した。なお、付替道路区域の低位部分は、畑地の造成により包含層が失われていたため、Ⅶ層で遺構確認調査を行った。

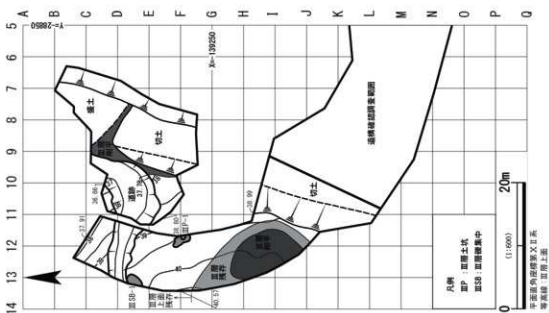
遺構はⅢ層で土坑1基（ⅢP-1）、礫集中1か所（ⅢSB-1）、Ⅴ層で堅穴建物跡1軒（ⅤH-1）、土器片集中1か所（ⅤPB-1）、剥片集中1か所（ⅤFB-1）、礫集中1か所（ⅤSB-1）、Ⅵ層で礫集中1か所（ⅥSB-1）を検出した（図Ⅲ-1・表Ⅲ-1）。ⅢP-1の大半は発掘区外にあるが、坑口部とその周辺から縄文文化期前葉の土器片約2,600点が出土した。ⅢSB-1は拳大の礫約100点のまとまりで、時期は白頭山-苦小牧テフラ降下以前の擦文文化期とみられる。Ⅴ層で検出した遺構の時期は、ⅤH-1が縄文時代中期、ⅤPB-1・ⅤFB-1・ⅤSB-1は同中期末葉と推測される。ⅤH-1の平面は東側を先端とする卵形とみられ、中央よりやや先端側に石囲い炉がある。ⅤPB-1は土器片約180点、ⅤFB-1は黒曜石の剥片・砕片約1,500点、ⅤSB-1は礫約750点がいずれもくぼ地にまとまっていた。ⅤSB-1の礫は被熱により大部分が破碎している。ⅥSB-1は礫石器2点と礫1点のまとまりで、時期は縄文時代早期後半である。このほか、発掘区北部で近現代の道跡を検出した。

遺物は土器6,381点、石器5,983点（水洗選別で得られた黒曜石剥片978点を含む）、礫1,531点、土製品5点、石製品1点を数える（表Ⅲ-2・3）。土器は前述したⅢP-1のものを除くと、縄文時

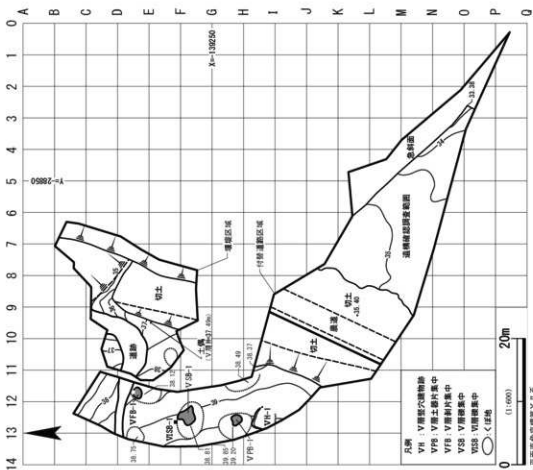
表Ⅲ-1 遺構一覧

遺構	付属遺構	グリッド	時期	計測値 (m)					備考	押出	図版
				上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	底点			
ⅢP-1		E11・12, F11	縄文前葉	0.40	0.40	0.10	0.10	0.02	土器片集中範囲 (2.96) × (1.74) m	Ⅲ-3	4
ⅢSB-1		G12・13	擦文 (B-1a/G10)	2.56	1.20	-	-	-	礫94点	#	5
ⅤB-1		H11・12	縄文中期	4.91	3.47	4.74	3.20	0.51	平面卵形	Ⅴ-4	5・6
#	ⅢP-1	H12	-	0.86	0.62	0.55	0.44	0.08	右側1号、機土なし	#	6
#	ⅢP-1	H11・12	-	0.25	0.16	0.07	0.05	0.10	-	#	#
#	ⅢP-2	H12	-	0.10	0.10	0.03	0.03	0.14	柱穴・枕穴	#	#
#	ⅢP-3	H12	-	0.10	0.10	0.02	0.02	0.15	柱穴・枕穴	#	-
#	ⅢP-4	H12	-	0.10	0.10	0.02	0.02	0.21	柱穴・枕穴	#	-
#	ⅢP-5	H12	-	0.06	0.06	0.04	0.04	0.12	柱穴・枕穴	#	6
#	ⅢP-6	H12	-	0.05	0.05	0.02	0.02	0.09	柱穴・枕穴	#	-
ⅤPB-1		G12	縄文中期末葉	1.90	1.60	-	-	-	土器片181点	Ⅴ-5	6
ⅤFB-1		D11	縄文中期末葉	1.76	1.30	-	-	-	黒曜石剥片・砕片1,461点	#	#
ⅤSB-1		E12, F12	縄文中期末葉	3.08	2.78	-	-	-	礫75点	#	7
ⅥSB-1		F12	縄文早期後半	0.28	0.22	-	-	-	礫石製品2点、礫1点	#	#

Ⅲ層



V・VI層



図Ⅲ-1 遺跡分布図

表Ⅲ-2 土製遺物集計

土製遺物の分類	出土位置・層位	遺 物						包首等					小計	総計
		Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層	Ⅵ層	Ⅶ層	Ⅷ層	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層	Ⅵ層・Ⅶ層・Ⅷ層	Ⅷ層		
土 器	Ⅲ層													
	Ⅳ層													
	Ⅴ層													
	Ⅵ層													
	Ⅶ層													
	Ⅷ層													
	不明													
	小計													
	土 偶													
	土 製品													
土 器	Ⅲ層													
	Ⅳ層													
	Ⅴ層													
	Ⅵ層													
	Ⅶ層													
	Ⅷ層													
	不明													
	小計													
	土 偶													
	土 製品													
土 器	Ⅲ層													
	Ⅳ層													
	Ⅴ層													
	Ⅵ層													
	Ⅶ層													
	Ⅷ層													
	不明													
	小計													
	土 偶													
	土 製品													
総計		2,610	13	4	181	4	2,812	683	1,866	807	213	3,574	6,386	

代早期後半の東銅路Ⅲ式・コッタロ式が多い。縄文時代中期末葉の北筒式がそれに次ぎ、同中期前半の円筒土器上層式、同後期後葉～末葉の三ツ谷式～御殿山式、擦文文化期等の土器も出土している。定型的な石器は、石鏃、石槍、石錐、石匙、削器、楔形石器、磨製石斧、たたき石（凹石を含む）、すり石（たたき石・凹石と複合するものを含む）、北海道式石冠、砥石等が得られている。縄文時代中期とみられる石槍や、東銅路Ⅲ式・コッタロ式に伴う石鏃・石匙、凹石とすり石が複合した石鏃形の礫石器が目につく。このほか、土偶の頭部1点、滑車形の土製品1点、円盤状土製品3点、石製品1点がある。土偶の頭部はⅤ層から出土した。形態や顔の表現から縄文時代後期後半のものと考えられる。

2 発掘区の設定

遺跡が所在する厚真町は、平面直角座標第Ⅱ系（世界測地系）の適用区域である。桜丘1遺跡の発掘区には、方位を平面直角座標に一致させた5mグリッドを設定した（図Ⅲ-1）。使用した図は、国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部（以下、室蘭開発）より提供された用地平面図である。

設定にあたり、グリッドラインの座標値をX・Yとも切りのよい値にするため、各ラインは座標値の整数下1桁以下が「0.000」・「5.000」（単位m）を通るようにし、東西方向のラインにはアルファベットの大文字を、南北方向のラインにはアラビア数字をライン名として付した。厚真町は平面直角座標の第3象限に位置するので、X・Yの座標値に負号（-）が付き、Xの絶対値は原点から南に向かって、Yの絶対値は原点から西に向かって大きくなる。そこで、東西方向のライン名はアルファベットの大文字を北から南へABC順に、南北方向のライン名はアラビア数字が東から西へ大きくなるように配置した。グリッド名は、各グリッドの北東角で直交する2本のライン名を組み合わせで表す。例えば、D8区は、Dラインと8ラインの交点より南西側の区画である。

発掘範囲杭とグリッド杭は、業務の委託を受けた測量業者が、発掘区近傍の既設4級基準点（室蘭開発設置）からトータルステーションによる放射法で打設した。標高は4級基準点（TH-17）の標高値（40.090m）をオートレベルで観測して使用した。

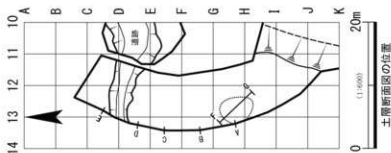
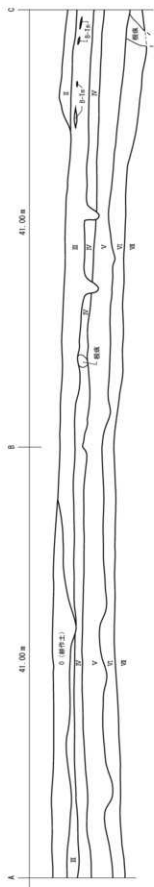
3 層 序

自然層はⅠ～Ⅶ層に分層した。図Ⅲ-2に発掘区西壁の一部と、後述するくぼ地1カ所の層序断面図を示す。層相の記載にあたっては、『新版標準土色帖（26版）』（小山・竹原2004）の「土色」、土

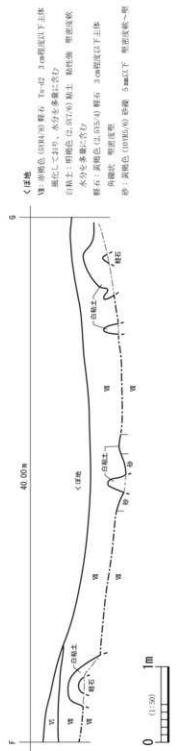
表Ⅲ-3 石製遺物集計

分類・石材		出土位置・層位	遺 跡										包含層等					小計	総計
			ⅡP-1		ⅡS-1		Ⅲ-1		ⅣP-1		ⅣS-1		ⅤS-1		0層・ 覆瓦・ 砂土				
			面積	厚さ	面積	厚さ	面積	厚さ	面積	厚さ	面積	厚さ	面積	厚さ					
製石部	石礎	黒曜石	2		2						1		3	38	12	1	54	59	
	石礎	黒曜石							1					15	1		16	17	
		珪質頁岩																	
	石礎	黒曜石			1									7	2		9	10	
		珪質頁岩												2	2		4	4	
	石礎	緑泥岩													1		1	1	
		黒曜石												3	1		4	4	
	石礎	珪質頁岩												4	5		9	9	
		珪岩													1		1	1	
	石礎	珪質頁岩													1		1	1	
		黒曜石												1	11	2	14	15	
	所器	珪質頁岩												3	2	2	5	5	
		黒曜石													1		1	1	
	鎌部	黒曜石												1	1		2	2	
		珪質頁岩													1		1	1	
	両面加工	黒曜石	1						1	1			3	1	13	3	17	20	
		緑泥岩													1		1	1	
	模形石器	黒曜石	1										1	1	1	1	3	4	
		黒曜石									1		1	3	13	4	21	22	
	二次加工	削片												3	1		4	4	
		珪質頁岩													15	5	20	22	
	微細刻痕削片	黒曜石				1								2	3	5	28	22	
		黒曜石	46		19	1	2	99	1,061	39	1,667	209	2,800	826	16	3,891	5,508		
	削片	珪質頁岩												3	15	7	25	25	
		メノウ													9		9	9	
		緑色珪岩							1				1	1	7	1	9	10	
		珪岩													1		1	1	
		青色片岩												15	2	17	17		
		片岩												2	1	3	3		
		蛇紋岩													1		1	1	
		安山岩												3		3	3		
		片麻岩												1		1	1		
		不明												1	1	2	2		
		黒曜石	1										1	14	1	1	16	17	
		メノウ												3		4	4		
		緑泥岩													1		1	1	
不明														1		1	1		
小計			51		22	2	2	102	1,064	40	1,663	224	3,005	881	62	4,172	5,855		
磨製石器部		磨製石斧	緑色珪岩											1	8		1	10	
			珪岩													1		1	1
		磨製石斧 未成品	青色片岩												4		4	4	
	片岩													3		3	3		
	磨製石斧素材	緑色珪岩												2		3	5		
		青色片岩														1	1	1	
	磨製石斧未成品	不明												1		1	1		
		蛇紋岩												2		2	2		
	磨製石斧素材	青色片岩												2		2	2		
		蛇紋岩												1		1	1		
小計												1	23		6	30	30		
礫石部	たつき石	安山岩													4	6	10	10	
		花崗岩													1		1	1	
		砂岩									1	1			12	4	2	18	
		花崗													2		2	2	
		片麻岩													1		1	1	
	すり石	安山岩												3	2	5	5		
		砂岩									1	1			7	2	9	10	
		片麻岩												1	1	2	2		
		花崗岩													1		1	1	
		不明													1		1	1	
	北海道式石冠	砂岩													2		2	2	
		砂岩												1	22	11	3	27	
	砥石	花崗岩														1		1	1
		安山岩												2		2	2	2	
	加工礫	砂岩												1	2		3	3	
		片麻岩													1		1	1	
		片麻岩													2		2	2	
	小計												2	2	2	59	30	5	96
礫	安山岩	安山岩		14		2				105		121	5	50	8	63	184		
		花崗岩												1	1	1	3	3	
	花崗玄武岩	花崗玄武岩												1	1	1	2	2	
		砂岩	47						2	392	441	8	180	27	2	217	638		
	花崗	花崗	3		1	2			94	100	17	168	31	1	217	317			
		片岩								1					1		1	1	
	チャート	チャート	27					2	126	155	2	30	3		35	190			
		緑泥岩	2						2	4	18	42			60	64			
	片岩	片岩												11	3	14	14		
		片麻岩								7	1	8			17	4	21	29	
	珪岩	珪岩											1	34		35	35		
		メノウ												3		3	3	3	
	不明	不明	3						18		21			8	2	10	31		
		小計		96		1	4	4		745	1	851	52	545	79	4	680	1,531	
	石製品	蛇紋岩													1		1	1	
	総計		51	96	22	3	6	106	1,064	785	3	2,536	279	3,632	991	77	4,979	7,515	

※磨製石や礫石部に関する削片などは便宜的に削片石部に含まれて集計した。
 ※VⅦ-1Cは、水成岩で得られた黒曜石削片978点を加えてある。また、VⅢ-1の礫には試掘坑Ⅸ（CKA19）出土の礫も含めてある。



- 透跡**
- 1) 灰黄色 (101K4/2) 砂礫土、粘着性中、明部流紋へ明
 - 2) 褐色 (101K4/1) 砂礫土、粘着性中、明部流紋へ明
 - 3) 黒色 (101K2/1) 凝灰土、粘着性中、明部流紋へ明
 - 4) 黒色 (101K2/1) 凝灰土、粘着性中、明部流紋へ明
 - 5) 黒色 (101K2/1) 凝灰土、粘着性中、明部流紋へ明
- テラ**
- 1) 濃い黄褐色 (101K4/2) 砂礫土、粘着性中、明部流紋へ明
 - 2) 濃い黄褐色 (101K4/3) 砂礫土、粘着性中、明部流紋へ明



図III-2 発掘区隣断面図

壤調査ハンドブック改訂版」（日本ベドロジー学会編 1997）の「野外土性」・「粘着性」・「堅密度」・「層界」を用いた（「記号等の説明」参照）。なお、近現代の耕作土や盛土は0層とした。

I層：Ta-bが混じる腐植質の砂土で、発掘区北側の斜面でみられた。II層との層界は明瞭である。

II層：1667（寛文7）年に降下した樽前bテフラ（Ta-b）である。明黄褐色（10YR7/6）を呈し、層厚は約35cmを測る。上位の約15cmは粗粒火山灰、下位の約20cmは軽石で、軽石の粒径は2.5cm以下が主体である。III層との層界は画然である。

III層：上位は黒色（10YR2/1）の埴土、IV層との層界付近は暗褐色（10YR3/3）の砂埴土である。層厚は約20cmを測り、粘着性は前者が中、後者が弱、堅密度はどちらも軟～堅で、IV層との層界は漸変である。なお、III層の上位には、10世紀半ばに降下した白頭山－苫小牧テフラ（B-Tm）の堆積する部分がある。また、Ta-bとB-Tmの間（図Ⅲ-2のテフラ1）、B-TmとTa-cの間（同図のテフラ2）にも、テフラの可能性のある薄い砂層が部分的にみられる。

IV層：約2,500年前に降下した樽前cテフラ（Ta-c）である。黄褐色（10YR5/6）を呈する砂質火山灰で、層厚は約15cmを測る。V層との層界は明瞭である。

V層：黒色（10YR2/1）の埴土である。層厚は約30cmを測り、粘着性は中、堅密度は軟～堅である。1cm程度以下のTa-dが少量混じる。VI層との層界は判然である。

VI層：暗褐色（10YR3/4）の埴土である。層厚は30cm弱を測り、粘着性は中、堅密度は軟～堅である。2cm以下のTa-d（5mm程度の岩片主体）が少量混じる。VII層との層界は判然である。

VII層：約9,000年前に降下した樽前dテフラ（Ta-d）である。赤褐色（5YR4/8）を呈する3cm以下の軽石（Ta-d2）が主体で、層厚は50cm以上を測る。軽石の上には5mm程度の岩片（Ta-d1）が部分的にみられる。

くほ地（図Ⅲ-2、カラー図版2下段右上）

発掘区の高位部分において、VII層が5m前後の範囲で円～楕円形にくほむ部分（以下、くほ地）を数か所検出した。くほ地の中央にトレンチを入れ、断面を観察したところ、いずれのくほ地も両端に「白粘土」の隆起が認められたので、人為的な堅穴ではないと判断した。周水河作用により形成された可能性も考えられる。

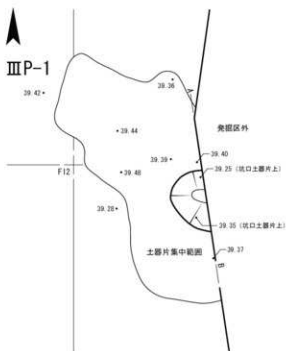
4 遺 構

（1）遺 構

III P-1（図Ⅲ-3、表Ⅲ-1、図版4）

E11・12、F11区のIII層下位で土器片の集中を検出した。集中範囲は北西－南東方向に長さ約3.0m、幅約1.7mの広がりを持ち、南東側は発掘区外にのびる。その場で潰れたような土器はみられないので、破片の状態で集められたと考えられる。土器片を取り上げながらIV層まで掘り下ると、発掘区の境界付近でIII層が半円状に落ち込んでおり、その中に土器片が集中していた。周辺から出土した土器片と比べて、内面を上に向けて重なるものが目に付く。落ち込みの内部を掘り下げ、土の堆積状況等を観察したところ、覆土と考えられる混在した土層、穴の形状などから土坑の可能性が高いと判断した。

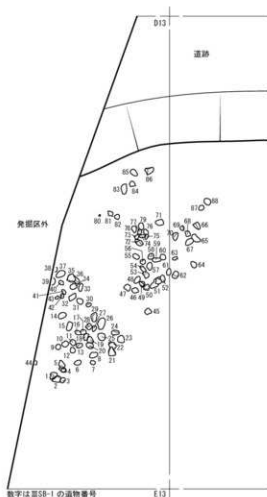
土坑の大半は発掘区外にあるので、部分的な調査にとどまるが、平面は円形か楕円形、坑底はやや狭く、壁は外傾する。構築面はIII層下位で、覆土は埋め戻しであろう。遺物は坑口部とその周辺にVI群A類の土器片2,610点が集中していたが、坑内からは出土していない。2cm未満の小破片が1,260点を数える。土器片に混じって石鏃2点、楔形石器1点、両面加工石器1点、剥片46点、石核1点



ⅢP-1

- 1: 灰黄褐色 (10YR4/2) $Ta-c$ と田層下位が混じる 粘着性弱 堅密度弱
 2: Vの境
 3: 黒色 (10YR2/1) 珉礫土 粘着性中 堅密度弱 $Ta-c$ が少量混じる

ⅢSB-1



数字はⅢSB-1の遺物番号

0 1:40 1m

図Ⅲ-3 ⅢP-1、ⅢSB-1

の黒曜石製遺物が得られている。時期は坑口部の土器から、縄文文化期前葉である。

(山中)

ⅢSB-1 (図Ⅲ-3、表Ⅲ-1、図版5)

D12・13区のⅢ層下位で礫のまとまりを検出した。まとまりの範囲を確認するため、礫を残しながら周囲のⅢ層を丁寧に掘り下げたところ、北東-南西方向に長さ約2.6m、幅約1.2mの範囲で分布しており、礫集中と判断した。南西側は発掘区外にのびる。また、周辺には白頭山-苫小牧テフラが部分的にみられた。記録作成後、Ⅳ層まで掘り下げたが下位に遺構は確認できなかった。

礫の分布は北東側と南西側の2か所に大きく分かれる。標高はほぼ同じで面的に広がり、北側は斜面の地形に沿ってやや低くなる。礫の大きさは長さ6~12cm 前後の礫で、形状は楕円体に近いものが多い。完形礫54点の平均重量は234gである。遺物は礫94点(合計重量20.956g)を数え、被熱や割れているものもみられる。時期は縄文文化期と考えられる。

(広田)

VH-1 (図Ⅲ-4、表Ⅲ-1、図版5・6)

H12区のV層を掘り下げていたところ、弧状に並ぶ数点の礫を確認した。その周囲で土層を上位から観察できる部分にトレンチを入れ、断面を観察した結果、平坦な床面の広がりや壁の立ち上がりが見られたので、堅穴建物跡と判断した。

堅穴の南西側は発掘区外にあり、東側と南側はⅦ層までの掘り下げが完了していた。そのため、堅穴の形状に不明な部分はあるが、検出できた部分から、平面は東側を先端とする卵形に近いと推測される。床面は平坦でⅦ層中に造られる。斜面上方の西壁は垂直さみであるが、下方の東側は立ち上がりが緩い。堅穴の掘削はV層中から行われ、覆土は黒褐色土の単層である。

付属遺構は炉跡(HF-1)、柱穴・杭穴など(HP-1~6)を検出した。HF-1は礫4点が弧状に配置された石囲い炉である。礫4点は、長さ約0.9mを測る楕円形のくぼみの西側にある。いずれも被熱しているが、礫で囲まれた楕円形のくぼみには焼土がみられなかった。HP-2~6は柱穴・杭穴とみられる。直径10cm以下で、深さが20cmに満たない小型のものばかりである。HP-1は堅穴に付属するものか判断しかねたが、堅穴の長軸上に位置することから記録した。

遺物は土器17点、石器等31点(炉材礫4点を含む)が出土したが、堅穴との関連をうかがわせる出土状況ではない。時期は堅穴の形状や床面直上の遺物などから、縄文時代中期と考えられる。

(山中)

VPB-1 (図Ⅲ-5、表Ⅲ-1、図版6)

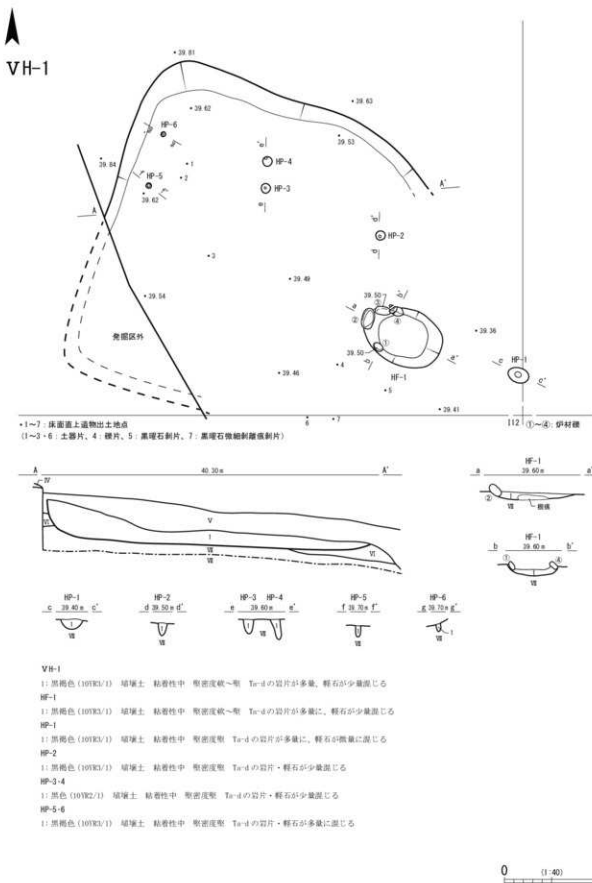
G12区のV層で、土器片の集中を確認した。集中範囲はくぼ地内に位置しており、長さ約1.9m、幅約1.6mを測る。くぼ地内からは、黒曜石の剥片(砕片を含む)も多く出土している。時期は出土した北筒式土器から、縄文時代中期末葉である。

(山中)

VFB-1 (図Ⅲ-5、表Ⅲ-1、図版6)

D11区のV層で、黒曜石の剥片・砕片の集中を確認した。集中範囲はくぼ地内に位置しており、長さ約1.8m、幅約1.3mを測る。遺物は黒曜石の剥片(砕片を含む)1,461点、両面加工石器、二次加工剥片の破片各1点、微細刻離痕のある剥片1点で、剥片のうち978点は1mmの篩を用いた水洗選別により採集した。剥片は大きいもので3cmを超すが、大部分は2cm程度以下のものである。被熱した剥片が数点みられる。黒曜石の多くは、1mm程度以下の球顆を多数含んでおり、赤井川産と推測されるが、微細刻離痕のある剥片は「花十勝」である。時期は周辺の遺物出土状況から、縄文時代中期末葉であろう。

(新家・山中)



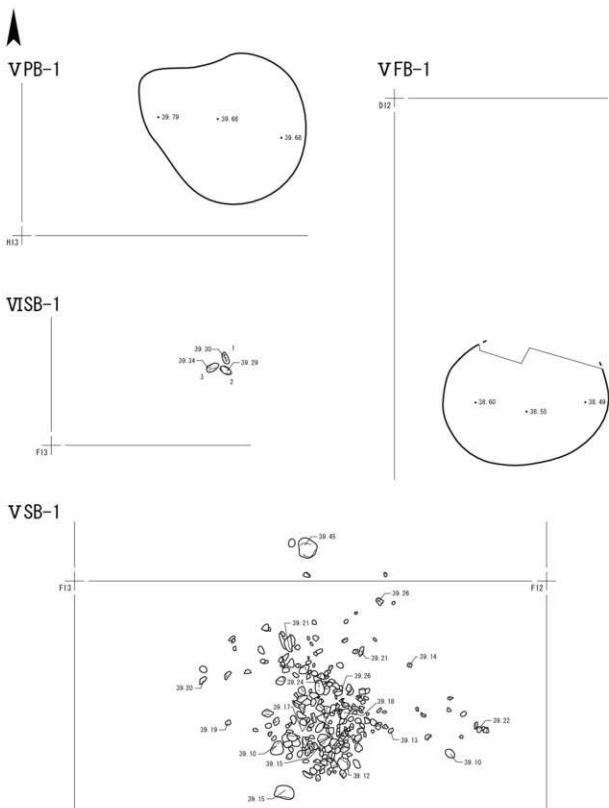


图 III-5 VPB-1、VFB-1、VSB-1、VISB-1

VSB-1 (図Ⅲ-5、表Ⅲ-1、図版7)

北海道教育委員会による試掘調査時にV層中位の礫のまとまりとして確認されていた遺構である。本調査では養生していた試掘時の礫を検出し、周辺のV層を出土した礫を残しながら掘り下げた。その結果長さ約3m、幅約2.8mの範囲で礫がまとまって分布していたため、礫集中と判断した。礫集中の範囲が緩やかに下がる出土状況であったためトレンチ等による土層の確認を行ったが、下位に遺構はなく自然のくぼ地に形成されたものと判断した。

礫集中はくぼ地に分布し、中央付近が密で一部折り重なった状態で検出した。遺物は礫745点(合計重量85.6kg)のほか、土器4点、石鉄未成品1点、黒曜石剥片39点が出土した。大半の礫は長さ10cm以下で被熱し破砕しているものが多いが、長さ30cmを超える大形のものもみられる。明確な時期は不明であるが、検出層位及び周辺出土の遺物から縄文時代中期末葉の可能性が高い。

(広田・山中)

VSB-1 (図Ⅲ-5、表Ⅲ-1、図版7)

E12区のVI層でたたき石(凹石)1点、すり石1点、礫1点がまとまって出土した。礫の下位に土坑や焼土は認められない。時期は出土した層位と周辺の遺物出土状況から、縄文時代早期後半である。

(山中)

(2) 遺構出土の遺物

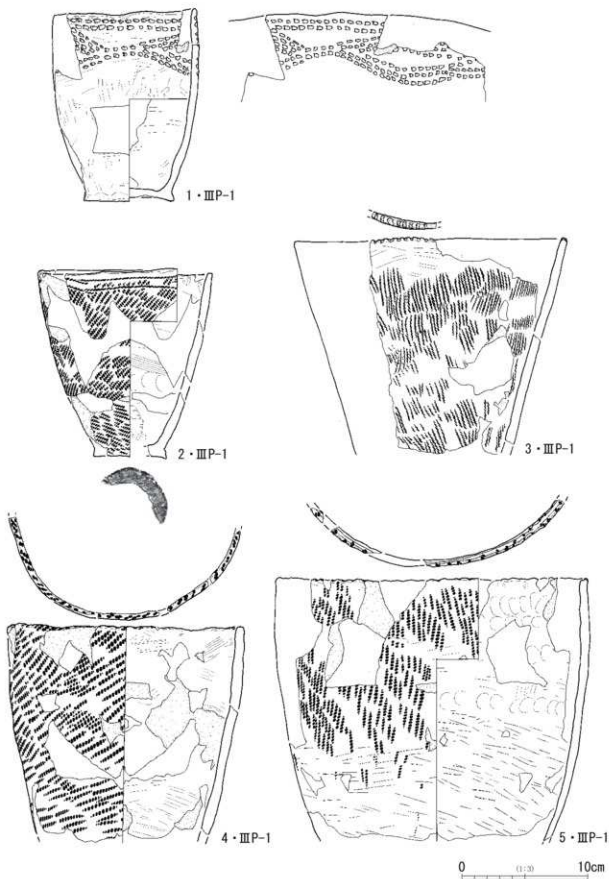
土 器 (図Ⅲ-6~10、表Ⅲ-4・5、カラー図版1・図版8・9)

ⅢP-1 (1~11) 1~11はVI群A類に分類した。1は小型の深鉢である。器形は底部から胴部中央にかけて膨らみ、そこから口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。口径と底径の差が小さく筒形に近い。口縁部は平縁でわずかに波打ち、口唇はやや尖りぎみである。底部は上げ底で端が外へ張り出す。地文はなく、半截竹管状とみられる工具を右から刺突することで、凸レンズ状の文様が描出される。欠損部分があるため詳しくはわからないが、この文様は、波状の刺突文列を複数組み合わせで構成されるようである。口縁に平行する刺突文は2列あるが、下位の方は器面を周回せず、凸レンズ状の刺突文列から派生するように見受けられる。器面調整は、外面の口縁部は横方向のナデ、胴部以下は縦方向のナデが主体であるが、底部のくびれ部分には横方向のナデもみられる。内面は横方向のナデである。接合面は外傾接合のみみられる部分がある。外面の胴部下半は赤みを帯びており、所々に焼け弾けとみられる5mm以下の浅いくぼみがある。内面は底面をのぞき、ススが附着する。

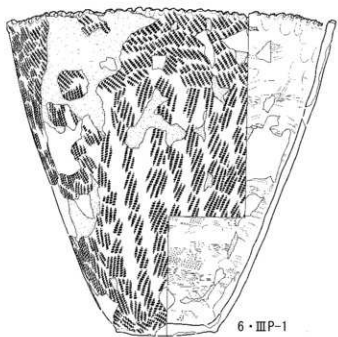
2は小型の深鉢である。器形は底部から口縁部に向かって開く。口縁部は平縁で、口唇は平坦である。底部は上げ底で、端がわずかに外へ張り出す。底面の中央付近は円形に欠落しているようで、穿孔された可能性もある。地文は口縁部から胴部中央付近までがLR斜行縄文、胴部の下位から底部がLR原体を上から回転させた斜行縄文である。口縁部には1段Rの縄線文が2条、底部のくびれ部分にはLR縄線文がめぐり、内面調整はナデで、工具のアタリがみられる。胴部中央付近には粘土紐接合部分のすぐ上に指頭圧痕が連続する。接合面は両傾接合と外傾接合のみみられる部分がある。

3は中型の深鉢で底部を欠損する。器形は胴部下位から口縁部に向かって直線的に開く。口縁部は平縁で、丸みがある口唇には、半截竹管状工具による右からの刺突文が連続する。口唇直下の2.5cm程は無文で、その下から1段Rの燃糸文が縦走ぎみに施される。内面調整はナデとみられ、接合面に顕著な傾きはみられない。外面は赤みを帯びた部分が多く、胴部下位には焼け弾けとみられる5mm以下の浅いくぼみの集中する部分がある。

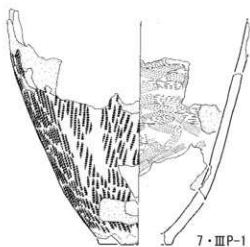
4は中型の深鉢で底部を欠損する。器形は胴部下位から上位に向かってやや開き、そこから口縁部にかけて垂直ぎみに立ち上がる。口縁部は平縁で、平坦ぎみの口唇にはLR縄文が施される。外面の



図Ⅲ-6 遺構出土の土器(1)



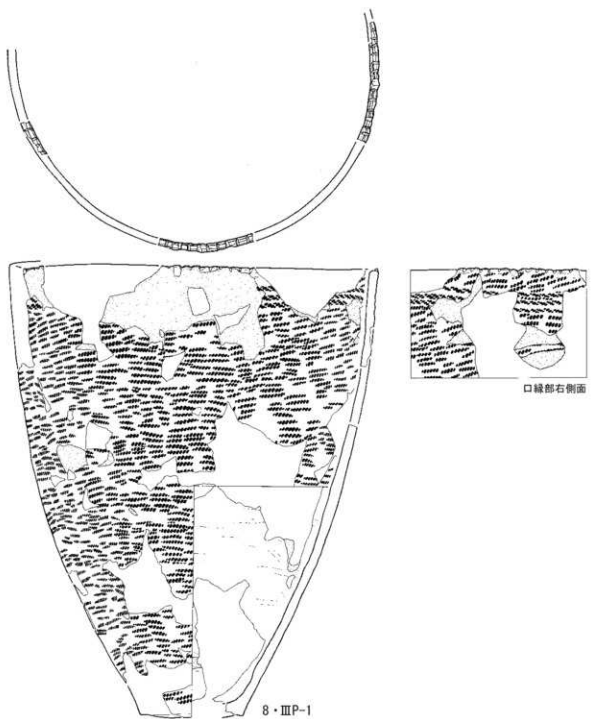
6・ⅢP-1



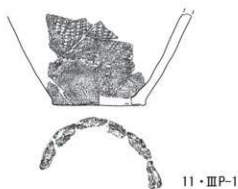
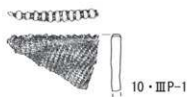
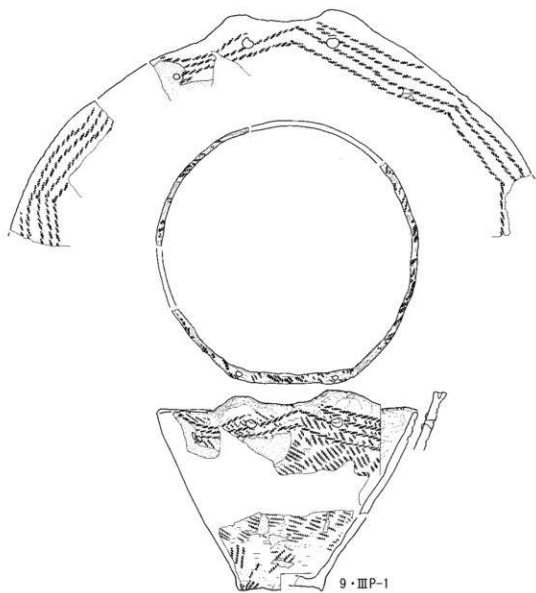
7・ⅢP-1

0 (1:30) 10cm

図Ⅲ-7 遺構出土の土器(2)



図Ⅲ-8 遺構出土の土器 (3)



0 (1:30) 10cm

図Ⅲ-9 遺構出土の土器（4）

LR 縄文は、口縁部から胴部上位で斜行するが、胴部下位では横走する。内面調整はヨコナデが主体で、接合面に顕著な傾きはみられない。胎土には6mm以下の転礫が目立つ。外面の口縁部から胴部上位にかけてススが付着するが、内面は外面とは逆に、胴部下位にスが多く、口縁部から胴部上位にかけてはスがあまり付着していない。

5は中型の深鉢とみられ、底部を欠損する。器形は胴部下位から中位に向かって膨らみ、そこから口縁部にかけてやや内湾しながら立ち上がる。口縁部は平縁で上端がわずかに外反する。口唇は平坦で内側に少し傾き、外端側を中心に縄の圧痕文が連続する。文様は口縁部から胴部中位にかけてRL縦走縄文が施される。胴部下位にも縦走縄文がみられるが、施文が浅く目立たない。器面調整は、内外面の胴部下位が横方向を主体とするナデで、工具の線条痕が目立つ。内面の口縁部や胴部中位には指頭圧痕の連続する部分がある。接合面に顕著な傾きはみられない。

6は中型の深鉢である。器形は底部から口縁部に向かって開き、上面観は楕円形を呈する。口縁部は平縁であるが、楕円形の短軸側が長軸側よりもやや高まる。丸みがある口唇には丸棒状工具による刻みが連続する。外底面中央部と端との間は浅くくぼむ。文様は口縁部と底部にRL斜行縄文、胴部にRL原体による縦走ぎみの縄文が施される。胴部には、無文部分と縦走ぎみの縄文が交互に施される部分があり、一見、帯縄文のようにみえる。内面調整は口縁部に指頭圧痕が目立つ。胴部以下はヨコナデで、工具によるアタリがみられる。接合面に顕著な傾きはみられない。

7は中型深鉢の胴部～底部である。器形は胴部下位でやや膨らんでから上に向かって開き、上面観は楕円形を呈する。底部の端は5mmほど垂直ぎみに立ち上がり、胴部下位との間がややくびれる。文様はRL原体による縦走ぎみの縄文で、無文部分と縦走ぎみの縄文が交互に施される部分があり、一見、帯縄文のようにみえる。内面調整はヨコナデで、工具によるアタリがみられる。接合面に顕著な傾きはみられない。

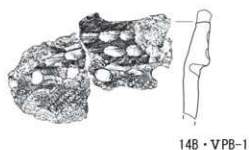
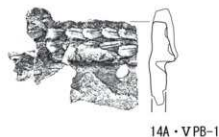
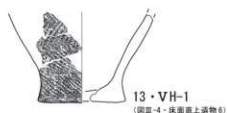
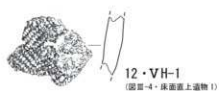
8は大型の深鉢である。器形は底部から胴部中位にかけて開き、そこから口縁部に向けてやや急角度に立ち上がる。口縁部は平縁で、平坦な口唇には楔状の工具による刻みが連続する。底部は外底面中央部が張り出すようである。地文のLR横走縄文は外面全体に施され、口縁部にはLR縄線文が3列めぐる。内面調整はヨコナデが主体である。接合面に顕著な傾きはみられない。

9は中型の鉢である。器形は直立ぎみの底部から口縁部に向かって大きく開き、口縁部には近接する2か所の波頂がある。どちらの波頂も上から刺突が加えられ、その下に外面から孔が穿たれる。なお、実測図左側の孔は補修孔とみられる。口唇は平坦でわずかに内側に傾き、RL縄文が施される。底部は上げ底である。地文は口縁部から胴部がRL原体による斜行・横走の縄文で、底部付近はLR斜行縄文である。口縁部にはRL縄線文が2～5条施される。縄線文のほとんどは下方へやや弓なりに施文され、5単位の押圧で口縁部を全周する。器面調整は内外面ともナデで、外面の底部付近と内面には、工具によるアタリがみられる。接合面は内傾接合のみられる部分がある。

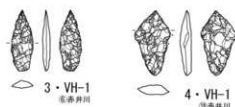
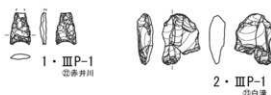
10の口唇は平坦で、丸棒状工具による刻みが連続する。文様はLR原体による縦走ぎみの縄文が施される。内面調整はヨコナデで、工具によるアタリがみられる。11は外底面の縁がやや高く、上げ底ぎみである。底面の中央付近は略円形に欠落しており、穿孔された可能性もある。胴部の文様はRL原体による縦走ぎみの縄文で、底部付近は無文である。内面調整はナデである。

VH-1 (12・13) 12はⅢ群の胴部で、LRとRL原体による羽状縄文が施される。13はⅠ群b類コッタロ式の胴部下位から底部で、底部の端はやや張り出す。文様はLRとRL原体による羽状縄文が施される。

VPB-1 (14) 14A・BはⅢ群b類北筒式の同一個体である。口縁部は肥厚し、ヘラ状工具によ

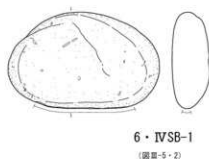
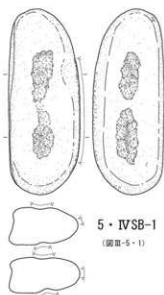


0 (1:3) 10cm



○数字：黒曜石産地推定分析番号（右横は産地）

0 (1:3) 5cm



0 (1:3) 10cm

図Ⅲ-10 遺構出土の土器（5）・石器

る押引文が2列施される。肥厚帯直下の円形刺突文は、やや斜め下から加えられる。平坦な口唇にはどちらも突起が付くが、Aの方は突起下に隆帯がのびる。地文はLR斜行縄文である。

VS-B-1 (15) 15はⅢ群の胴部である。上半は剝離しているが、下半にRL縄文と結束部分が見られる。

石 器 (図Ⅲ-10、表Ⅲ-6、図版14)

ⅢP-1 (1・2) 1は凹基の無茎鎌で、尖端を欠損する。2は楔形石器である。腹面は平坦でリングが密集する。1・2とも黒曜石製で、蛍光X線分析法により産地を推定した(Ⅵ章1節参照)。出土状況から、どちらも統縄文文化期前葉のものと考えられる。

VH-1 (3・4) 3は細身の木葉形、4は鎌身より茎が長い。3・4は黒曜石製で、蛍光X線分析法により産地を推定した(Ⅵ章1節参照)。

MSB-1 (5・6) 5はたたき石のうち凹石と称されるものである。扁平な棒状礫の両主面には、敲打によるくぼみが2か所ずつみとめられる。敲打痕は右側縁にもみとめられる。6はすり石である。扁平楕円礫の側縁にすり面がみられる。石材は5・6とも砂岩である。

5 包含層出土の遺物

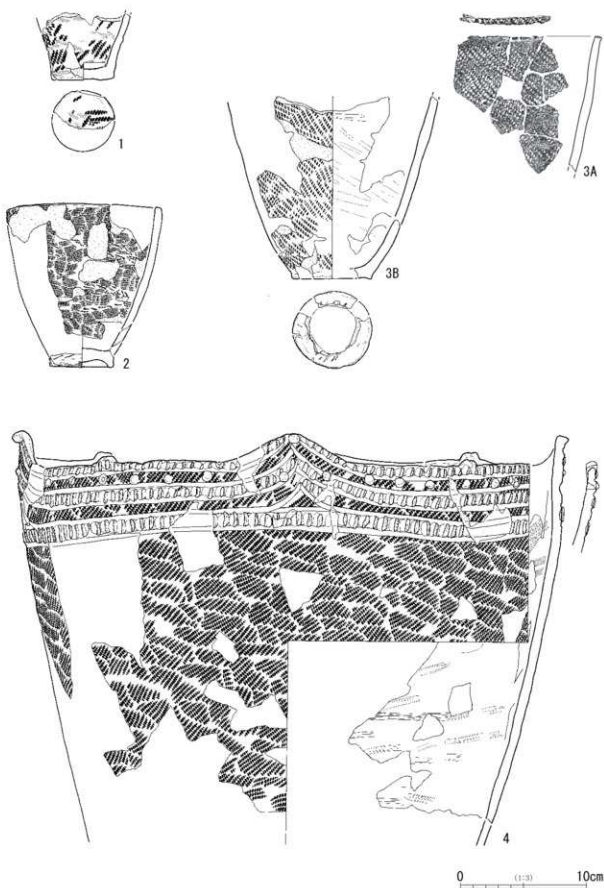
(1) 土 器

出土傾向 包含層等から出土した土器は3,569点を数える。Ⅲ群からⅥ・Ⅶ群、Ⅴ層からⅠ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ群、Ⅵ層からⅠ群が主に出土した。点数はⅠ群が1,628点で最も多く、次いでⅥ群698点、Ⅲ群642点、Ⅳ群322点の順となる。土器の分布は図Ⅲ-25に示した。

Ⅰ群はb類の東銅路Ⅲ式・コッタロ式が主体である。高位部分のⅤ・Ⅵ層から出土しており、E12区、G11区周辺に多く分布する。中茶路式はないが、東銅路Ⅳ式は低位部分(遺構確認調査範囲)で少数得られている。Ⅲ群はb類の北筒式が主体で、a類の円筒土器上層式は少ない。口縁部の破片などからみて、類別できなかった胴部破片の大半は、b類のものと推測される。Ⅲ群b類の土器片集中(VPB-1)に近いG12区で出土点数が多い。Ⅳ群のほとんどはc類の三ツ谷式～御殿山式に相当するもので、土偶頭部が出土したE9区の周辺やI11区周辺に多く分布する。これらは低位部分(遺構確認調査範囲)でも数点出土している。a類はごくわずかで、b類はない。Ⅴ群は爪形文の施されたa類がH11区付近にまとまる。Ⅵ群のほとんどはa類で、高位部分の北側やⅢP-1の周囲に分布する。b類の後北C₂・D式はわずかである。Ⅶ群は高位部分の北側、ⅢSB-1の周辺に分布する。なお、一次整理作業時の過失により、G11区から出土した土器の大部分をC11区として登録してしまった。このため、土器合計・Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ群土器の分布図では、C11区の点数を示していない。また図Ⅲ-26「Ⅴ・Ⅵ層石器・礫合計」、図Ⅲ-27「Ⅴ・Ⅵ層黒曜石剥片」・「Ⅴ・Ⅵ層礫」も同様の理由でC11区の点数を示していない。

Ⅰ群b類 (図Ⅲ-12～14、表Ⅲ-4・5、図版11・12)

口縁部 (5～22) 5～7・10は口唇が張り出す。5の口唇には爪状の刻みが連続し、外面には複数列の組紐状文が施される。赤色顔料が付着する。6の口唇にはLR原体の刻みが連続する。外面には縦位のLR縄文の下に、LR縄文3条、LR斜行縄文が施される。7は口唇に沿ってRL縄文が押圧される。外面にはRL原体を用いた撚糸文が施される。8・9の口唇は丸みを帯びる。8は口縁部がわずかに外反し、外面にはLR斜行縄文が施される。9の外面は口唇直下の1.5cm程が無文で、その下にLRとRLの羽状縄文が施される。10は口唇に圧痕がみられるが、原体・工具は不明



図Ⅲ-11 包含層出土の土器(1)